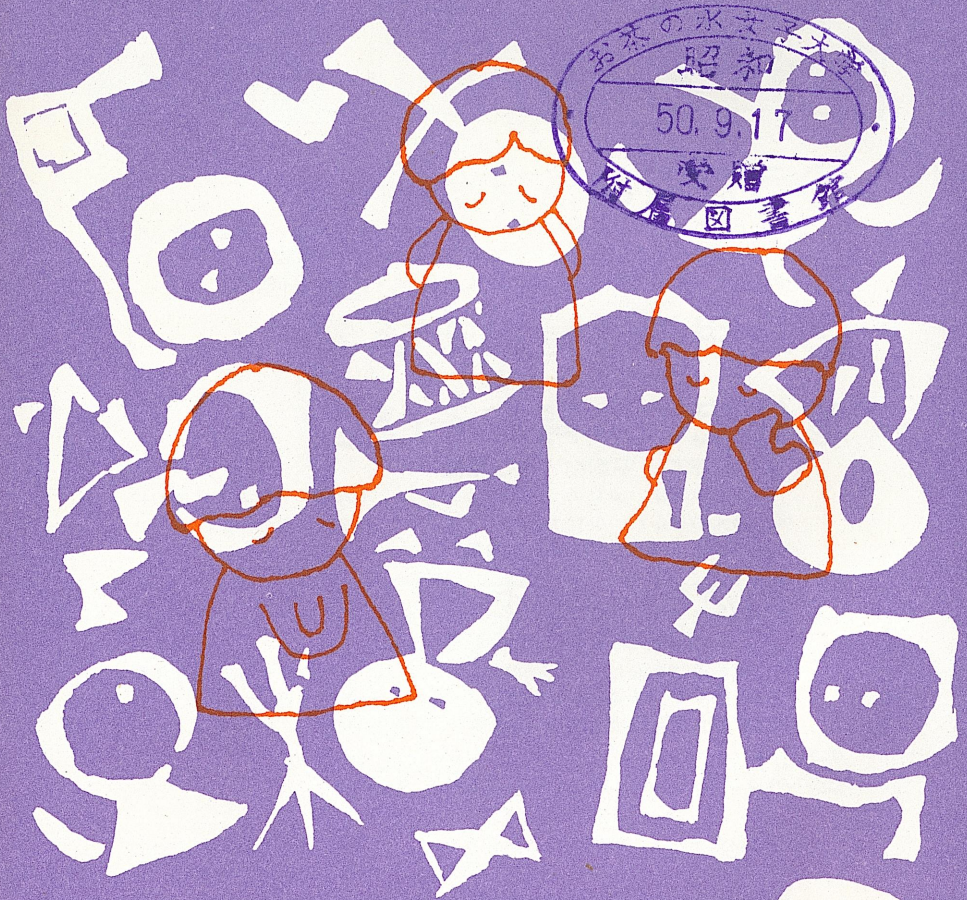


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育



第七十四卷 第十号 日本幼稚園協会

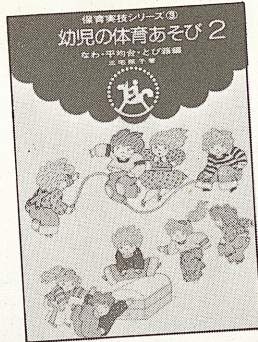
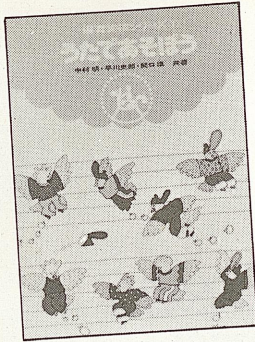
10



保育者のための

保育実技シリーズ

日々の保育指導にすぐ役立ちます。



① うたであそぼう

子どもの音楽遊びを、歌唱中心から、手あそび、おどり、楽器演奏、音楽に合わせての運動遊びなどに発展させた解説書。掲載32曲。

中村 明・早川史郎・関口 準 共著 B5判・128頁 1,000円

② 幼児の体育あそび 1

マット・ボール編

③ 幼児の体育あそび 2

なわ・平均台・とび箱編

子どもの敏捷性、瞬発力、巧緻性などを培う目的で、子どもの心理の把握、導入のしかた、保育者の心がまえなど、豊富な図説で解説。

三宅照子著 B5判・128頁 1,000円

④ あたらしいあそび

幼児の安全能力を育てるために

新考案の遊びを通して、安全能力を培うための実技指導をはじめ、年間保育計画案や、基礎的な理論づけまで紹介した期待の書。

幼児の安全保育研究会編著 B5判・132頁 1,000円

⑤ 幼児のリズムあそび

フォークダンス・わらべうた編

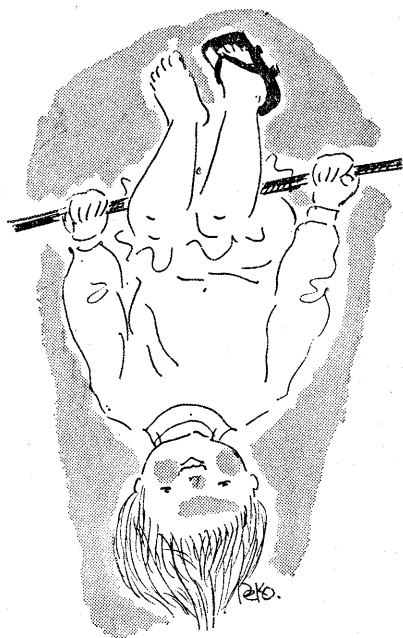
運動やあそびは、幼児の体の働きを高め、心の働きをも積極的に高めま
す。幼児向けのフォークダンスとわらべうたの踊りと遊びの指導書。

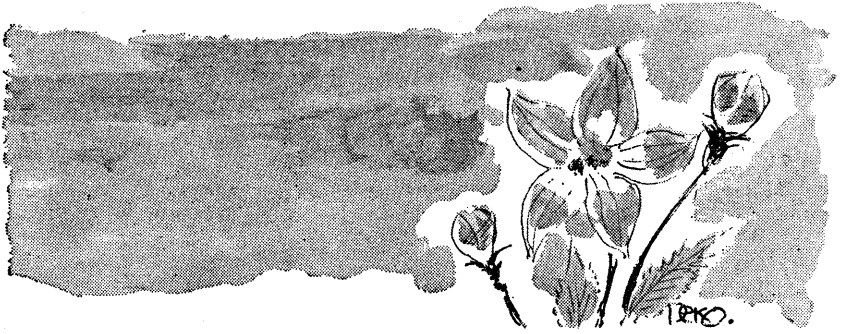
日本フォークダンス連盟編 B5判・132頁 1,000円

(以下続刊)

幼児の教育

第七十四卷 第十号





幼児の教育 目次

——第七十四卷 十月号——

©1974
日本幼稚園協会

表紙 三好碩也
カッタ 中島英子

おとなの繰りごと——幼時と音楽——……………利根川 裕……………(4)

幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を……………松隈玲子……………(8)

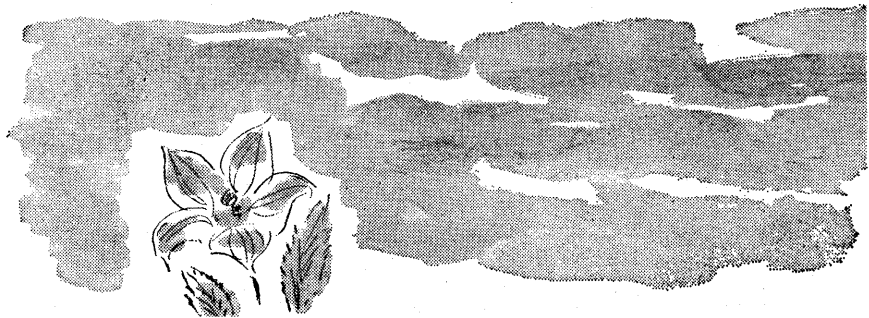
私の幼児教育論XI保育の基本(九)……………神沢良輔……………(12)

保育における子どもの「自由」……………大場牧夫……………(16)

うっかりしている時——倉橋惣三選集より——

☆うっかり笑って……………西野紀代子……………(20)

☆ある日のできごとから……………光木美子……………(22)



倉橋先生と共に……………田坂ユキ(24)

私の保育……………村石京子(26)

◇講演◇

母なる大地を求めて……………周郷 博(31)

☆周郷先生の講演をきいて……………さかたのぶこ(42)

☆お誕生会……………蕪木寿江(46)

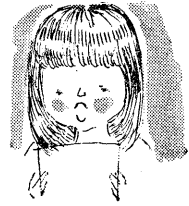
倉橋賞を受賞して……………利島 保(50)

橋詰良一著「家なき幼稚園の主張と実際」より(十二)……………(52)

「それぞれの子どもらしさを求めて」より(二)……………(59)

おとなの繰りごと

——幼時と音楽——



利根川 裕

ある日、訪ねてきた友人がウィスキーをふくみながらいった。
「きみ、知っているかね、スタンダードは仕事をとりかか
る前には、かならずモーツァルトを聴くのを日課にしていた
そうだぜ」

この一言がこちらの胸に残り、スタンダードにあやかっ
て、まずモーツァルトを、という日課をしばらくつづけてみ
たことがある。おかげで、文章がメキメキうまくなったかど
うか、それは知らない。

ところで、私の聴くモーツァルトは、むしろレコードであ
る。そして、うかつなことに、スタンダードも私とおなじよ
うにレコードを聴いていたのであらうと早合点していたのだ
が、考えてみれば、スタンダードの時代に、LPはもとよ
り、SPも電気吹込みもあらうはずはない。さては悪友にい

っぱい喰わされたか、と地団駄ふんだが、仕事の前にモーツ
ァルトを聴くよろこびのほうはますます募ってきて、悪友に
は悪友の効能があるものだ、むしろ彼に感謝したくらいで
ある。

しかしまた、彼が満更ウソをついたのではないとも考えて
みた。たいへん独創的なモーツァルト論を書いたスタンダー
ドである。スタンダードはきつと、毎日モーツァルトを自分
で弾いたのではなかったか。そう思いつくと、スタンダード
への嫉妬なのか、モーツァルトへの嫉妬なのか、とにかくこ
ちらも、ぜひともモーツァルトを自分の指のなかに封じこめ
たくなって、憑かれたようにピアノに向い出した。

——と書いてくると、いかにも私がピアノの名人上手のよ
うに聞こえかねないが、話はそううまくはいかない。ピアノ
にかぎらず、私が操りこなせる楽器は何一つない。残念なが

ら、ちゃんと先生について訓練したことは一度もないのである。三十の手習いか、四十の手習いで、いい加減中年になつてから、独学でバイエルをはじめてみたが、その音を聞いた近所の人たちが、

「おたくの坊っちゃん、ピアノに熱心ですね」

などというのを耳にしたうちの小セガレが、

「たのむよ、おとうさん。ピアノやめてくれないかな」

という始末。そのときセガレは、たった小学校二年生だったのだから、私の野心と自尊心がどれほど手ひどい衝撃をうけたかは、いとも哀れなことである。しかし、盗人にも三分の理、そのときの私が、モーツァルトを弾くスタンダードの幸福を、自分もまたぜひとも所有しなければならぬと本気に決意していたのは事実である。

* * * *

くやしきぎれにいうと、私の育った北陸の小さな町では、わが家はもとより、ピアノのある家などはほとんど皆無で、たしか中学校長の家と、女学校の音楽の先生の家と、郵便局長の家くらいではなかったかしら。蓄音機は時計屋で扱っていたが、たまさか、その店頭にかかっている新譜音盤ポスターとなると、××の浪曲だったり、××の○○音頭なのだ

から、かりに潜在的に音楽的大才を所有していたにせよ、どう開花させてみようもなかった次第である。わが町に限るまい。これが三十年か四十年前の日本の平均的環境であつたはずである。

大才であるかはそのまか、しかしあらゆる幼児や少年には、人間の本能としての音楽的表現の要求はひそんでいるわけで、文章でも画でも満たされない厄介な欲求不満が噴きあげてくると、私はハーモニカにむしゃぶりついたものである。ハーモニカは滝廉太郎や山田耕筰を誘いだしてはくれたが、茫漠として渦巻いている少年の内的世界は、廉太郎や耕筰が導いてくれる方向だけではあきたらず、さりとて、ほかに誘導してくる音楽世界を知らないまま、次第に憂鬱になり不機嫌になり、千切れ千切れに湧いてくる想念を自分勝手な音の組合せに託すはかばかかった。

あのとき、もしモーツァルトを知っていたら、もしショパンを知っていたら、もしドビュッシーを知っていたら、いや、そんな名前はどうでもいいのだが、とにかくそういう音楽世界のあることを知っていたなら、少年はあんなにも自分を扱いかねて身もだえしなくてもよかつたのであつたらう。

後年、私はモーツァルトの名もショパンの名もドビュッ

1の名も覚えた。また、いささかはその音楽世界に馴染むようになった。それらのおかげで、私の内的世界にある拡がり、ある方向づけができたのはたしかである。

いかにもいまの私は、なんにも知らなかった、かつての幼時や少年期とは比ぶべくもないほどの音楽的知識をかかえている。しかし、あの小さかったとき、何か音が鳴ってくれ、どこかに自分の心をいいあててくれる音はないか、と探し求めていた本能的激情を、いまはもう失っている。

ふくれ面してハーモニカを吹いていた私と、カラヤンとベームの相違などを吹聴したがるいまの私とは、疑いもなく往時のほうが上等である。ここでは、音楽はすこしも教養的装飾にわずらわされることなしに、いわば無垢のまま要求さされていたのだから。

後悔話ばかりではシャクだから、中年になってからの、よろこばしい音楽体験を一つつけ加える。

×年前、私は東京文化会館の大ホールで、モーツァルトのオペラ『ドン・ジョバンニ』を聴いていた。それが、ごく質のいい演奏であったかどうかは、このさいどちらでもいい。また、その当時私がどんな心境で生きていたのかも、このさいは省略するとして、この序曲が演奏されはじめてから二時

間あまり、ついにドン・ジョバンニが劫火に焼かれてしまう終りまで、そこで鳴り、歌われる一切の音が、私のなかに吸いこまれてゆき、私の心という心のすべてが正確無比にいいあてられ、のみならず、私のなかにあって私の気づかずにいたものが引きだされ、それに明瞭なイメージが与えられたのである。

私は、自分が発見されてゆくような思いに感動し、陶醉し、圧倒されていた。そして私は、かつてのこどものとき、音楽にさらわれたいと焦りながら、ついにさらってくれる音楽に出会えず苛立っていた自分の姿を、数十年ぶりにはっきりと再現することができ、しかもその未遂だった欲求が、いまはじめて、ここで満足させてもらえているという実感のさなかにいたのである。

そのとき以来、モーツァルトは音楽という音楽のなかで、私にとっては格別なものとなった。

* * * * *

私の育った時代の環境と、うちの小セガレのそれとでは、たいへんな相違がある。そして、いまのところ私のもつ諸能力は、まだ小セガレ程度をぐんと凌駕していると思っ

る。

音楽を意識的に聴こうとする苦勞は、私のほうが何十倍も重ねてきたはずにもかかわらず、とても彼の耳にはかなわな
い。音楽なんて耳でだけ受取るものじゃない、とりきんでは
みるものの、これは負け惜しみである。けっきょくは、耳の
問題である。他のどんな能力が参加してくれようと、耳の
悪いところにいい音楽世界は成立しうべくもない。そして残
念ながら、耳の鍛錬は、もうおとなになってからでは遅すぎ
るのである。

小セガレが、私よりいい耳をもっているために、そしてま
た、かつての私よりうんと多くの音楽世界を知っているため
に、むかし私が自分をさいなんでみたような音楽的飢餓から
免れえているのかどうかは、よくわからない。またそのため
に、彼が私より広くて自由な自己表現の世界を身につけてい
るのかどうかも、よくわからない。あらゆる人間の欲望が、
より多くの充足を求める貪婪なものである以上、恵まれた人
間には恵まれたなりの飢餓状態を生みだすでもあろう。ただ、
彼にも飢餓状態があるとして、それが往時の私より音楽的質
度の高いものであることだけは間違いない。

蛇足をつけ加えれば、小セガレには、小学校一年になろう

とするところから、ピアノのレッスンを受けさせている。日本
の芸ごとの世界では、六歳六か月から稽古をはじめよ、とい
うならわしがあるらしいし、たまたま小セガレのレッスンは
六歳六か月目からはじまったのだが、私の気持としては、芸
ごとを仕込みたいのではない。

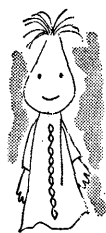
気取ったことをいうようだが、私はこんにち、私たちを取
巻いている音の氾濫にほとほと閉口している一人である。そ
こでは音楽的秩序とは無関係な、恣意的で偶発的で露出的な
音のけたたましさが、まるで人間解放の表現でもあるよう
にかき鳴らされている。あるいは少しばかり楽器をいじれる
若者が、芸人気どりで音を発散させている。

できることなら、小セガレが音楽をそういうものと区別す
る能力をもってほしいのである。さいわいレッスンの先生
は、きわめてオーソドックスに、きわめてスティックに教え
てくださっている。

なろうことなら、いつの日か、モーツァルトの「二台のピ
アノのためのソナタ」でも小セガレと弾いてみたいのだが、こ
れはオヤジのほうのウデがそこまで届きそうにない。

(作家)

幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を



松隈玲子

○心のゆとり・待つ保育

「保育者が心のゆとりをもてる時」とはどんな場合であろうか。

一九七二年に、保育科の卒業生に対して調査したアンケートの回答をまとめると次のようである。

- 一人一人の子どもをよく理解し、子どもと心が通じあう時
- 保育経験を積み、与える教材や日案に対する幼児の反応が予想できる時
- 子どもばかりでなく、親（とくに母親）とのコミュニケーションが円滑に結ばれ、自分の保育を理解してもらえた時
- 突発的な事柄が生じた時でも、すぐ全員を把握できる程度の人数（一人の教師に園児二十名以内）を担任した時
- クラスの子どもの年齢や発達差が著しく異なるものや、特別に手のかかる子どもがいない時

● 保育者が健康で疲労感がなく、その日の保育の準備が充分にできている時

その他、キリスト教保育を行なっている保育者からよせられたものとして

- 保育者が神を信じることによって生きるということに確信をもち、子どもに述べ伝えるものの対象を明確にもっている時
- 保育者自身が神に生かされているというよるこびが心にあふれている時

などがみられる。

この調査によせられた、多くの保育者たちの意見の中から、日々子どもとのふれあいの中で、右にあげられたような「心のゆとりをもてる時」を大切に思い、「ゆとりある保育」を願いながら、さまざまな社会の要求や園の事情などから、自分の理想とする保育のあり方と、現状との問題に悩む保育者の実状を、うけとめる

ことができた。

このような現状にある時、望ましい保育の場、理想とする保育理念の達成を究極の目的と考えながらも、現在、日々育ちゆく子どもたちのために、すぐにでももつことのできる、あるいは、もてるように努力していくことのできる「保育者としての心のゆとり」を考えてみたい。

心のゆとりとは、心が無目的に空白の状態にあることではない。目標達成に対する十分な見通しの上で、現状と目標との間の行程をあせらず、着実にすすんでいく気持をもてることであり、自己を客観的にみつめ、一つの目標に向かって例えまわり道であっても希望を失なわず、困難に堪え、障害に打ちかかっていくことのできる心のもち方であると考ええる。以上の立場から、心にゆとりのある保育のあり方を、若干の事例を通して明らかにしたい。

一 あるがままの子どもを、あるがままの状態でうけとめ、そこから共に歩みをはじめようとする保育者であること

これは、私が幼児教育の道へ足をふみ入れて間もなく、故人となられた福永津義先生にさし示された、次のことばから導き出されたものである。

「人間はみな神の作品であるから、神の作られたものに、出来

そこないはない」この教えは、爾来ずっと私の心のささえとなり、基本的な幼児教育の理念の源となった。

あるがままの子ども、それがどんな子どもであっても、神さまのご計画のうちに生かされている子どもであることを思い、そのままの状態でしっかりと受けとめ、そこから共に歩みをはじめようと願う保育者の心、それは、子どもが幼稚園から帰った時、「けんかをしなかったか」「叱られなかったか」とたずねて後、はじめて「よい子」であったことをほめる母親ではなく、帰ってきたわが子をそのままの姿で受けとめ「お母さんは待っていましたよ」と優しく迎え入れる母親の心であり、昨日はどんないたずらやまちがいのあった子どもでも、今朝登園してきたその子を全く新しい気持で暖かく迎え、受け入れることのできる教師の心でもある。

保育の場についてみると、保育者はともすれば集団統制がよくとれている時には、個人を十分に把握しているような気持におおくり、集団のレベルからはみ出る子どもたちのみの指導にとらわれがちとなる。しかし個人を大切に考える立場からは、一つの集団がみな標準化され、画一的な頭ならしの指導が行われることは望ましくない。保育者が心のゆとりをもつということは、「目だたない子」を「存在を忘れられた子」にしてしまわないためのキ

イポイントであり、集団に入れぬ子、集団をみだす子を、集団の外においてみるのではなく、その子をも含めた広い集団としてとらえることのできる目を養うことであると考える。

二 自分を大切に思う気持と同様に他人をも大切に思う、思いやりの心を、保育者と子どもとの日々のふれあいの中で、さまざまな経験を通して、共感の中から育てていこうとする保育者であること

自分を大切に思うのと同様に他人を大切に思う心は、自分をも他人をもよく知るといふことをぬきにしては育たない。保育者は子どもたちとの日々のふれあいの中で、共にするさまざまな経験を通しての共感の時を、大切に考えたい。

例えば、障害をもつ子をうけいれる場合でも、基本的な理念として考えたいのは、障害児の障害を保育者も他の子どもたちもあるがままにうけとめ、適切な理解の上になつて、共に仲間としての歩みをはじめることが大切であり、障害に気づかぬふりをして、可哀そうだから手伝つてあげようという安易な同情心を育てることではなく、「このお友たちには、今、何を手伝つてあげ、何を自分でさせることがほんとうの思いやりであるのか」を判断し、障害児を仲間として共に歩んでいく子どもを育てることであ

ろう。このことはまた、障害をもつきょうだいのある子が、同じ集団にいる障害児に何の構えもたず接することができる、祖父母同居家庭の子どもが、老人ホーム訪問の際に、すすんで老人のそばに坐り、肩たたきの役を引きうけること、年齢差のない弟妹をもつ年長児が、縦割りクラスでの年少児との遊びがよくできるなどの事例に併せて、幼児期における、望ましい人間形成にかかわる経験学習のあり方であろうと考える。

保育者は、また、自分のことと同様に相手のことを考えるばかりでなく、その相手と他のものとのかかわりについても考える心のゆとりをもつことが望まれる。即ち、保育者と一人の子とこの動きのない二者関係的な把握ではなく、「人とのかかわり」「物とのかかわり」「集団とのかかわり」「環境とのかかわり」をもつ個人として、三者関係、多者関係的な把握ができるということは、教師と子どもと親、教師と子どもと他の子ども、園と家庭と社会などの関係のない手となり、関係の発展をもたらすものとなることが期待されるからである。

三 個々の子どものレディネスがとこのう時をあせらず待ち、適切に成長の節をとらえることのできる保育者であること
現代の教育の場においては、しばしば子どもの欲求以前から、

目標に向つて訓練が開始され、なかば強制的に興味をよびさせ、学習経験をさせようとする傾向がみられる。このように、本人の欲求やレディネスにお構いなく開始された身辺自立の習慣や稽古ごとは、しばしば順調にすすまず、子どもは自信を失つて逃避しようとし、親は心のゆとりを失つて叱責、強制、命令のことでばかり返す。

このような状態は園での不適応行動となつて表出され、その原因が親子間の精神的な不安定から引きおこされたものであることを知らされる。このようにゆとりを失つた心に、子どもの成長の節を適切に見定めることは望めない。啜啄^{まろたく}同時の諺のように、保育者が心のゆとりをもつということは、卵の中の雛のどんなに小さな反応をも見逃さぬ細心の注意と、時が訪れるまで決して巢を離れず卵を抱いてじつと待つことのできる親鳥の忍耐の心をもつということである。

このことを、三歳の誕生日を迎えて間もないY子の事例から考えてみよう。

「かわいいウサちゃんのタオルケット」は、Y子の自己依存の根源であり、二歳をすぎる頃まで、「それさえあれば一人で居れる」代理ママ的な存在であった。親や周囲が「汚れているから」「一日中さわつてはおかしいから」手離すようにといえは、

ますます固執し、反抗した。しかし二歳の半ばをすぎて、Y子が最も望んでいた「次子誕生予定」を知らされた日から、Y子の心の葛藤がはじまった。

「タオルケットを手離すこと」が強要されなくなり、かわりに「お姉ちゃんになることへの期待」がかけられるようになったことが、Y子の心の内的葛藤の芽生えを促進する結果をもたらした。「お姉ちゃんだから、みんながおかしいというタオルケットを手離せないことからぬけ出さなければならぬ」という気持と「お母さんと同じように思つてきたタオルケットを手放すことは淋しい」という二つの心のたたかいは、弟誕生のその日まで継続された。服も靴も帽子も玩具も、よるこんで生れてくる赤ちゃんのために自分のタンスの中から選り出していたY子は、弟誕生が現実になったその時、「これも赤ちゃんにあげる」と自から宣言し、タオルケットを手離す決心がついたのである。

このように「心のたたかいに自から打ち勝つ」ことの経験は、仕組まれたレールの上のせられての経験学習の場合よりも、子ども自身にとって「自分できめて自分で実行し、成就した」という大きなよろこびと自信をもたらし、次の成長への大切なステップとなると同時に、退行現象への歯どめともなるように思われる。(この項つづく)

(西南女学院短期大学)

私の幼児教育論 XI

神 沢 良 輔

三 保育の基本 (九)

—— 幼児とのかかわり合いの中で ——

(xi) “そそう” したときこそ、幼児とのかかわりをもつチャンスである。

(1)

学生の幼稚園教育実習について、ある教育委員会へお願いにいったとき、その学校教育課長さんから、

「今の若い先生方は、すべて、短大以上の卒業生で幼児教育について、なんらかの専門的な知識を身につけた人ばかりなんですよ。幼児が、“そそう”をしたとき、その幼児を裸にして、ホースでお尻を洗い流したりするんですよ。このようなことが平

気のできるということは、いったいどうなっているんでしょうか」

というような意味の話が聞かされた。

もちろん、このような行為は、すべての若い保育者に必ずしも共通の問題であるとはいえないけれども、私も過去において、いろいろな形でこのようなことは経験したことであり、その都度、園長としての自分の保育者に対する影響力の弱さをなげいたことも多かったし、また、保育者養成の困難性を感じとったことでもあった。

だが、このようなことについては、幼稚園の現場を離れるときに、美しい思い出を残したいという努力が、私の心の中で働いたというわけでもないと思われるのだけれども、どちらかといえば、いやな思い出として忘れ去るようにしていたのではなかったかと、さきほどの課長さんの話を聞きながら反省したりしたので

あった。

そこで、やはりこの問題をここでとりあげることは、それなりの意味があるのではないかと考えるのである。

(2)

いわゆる“そそう”とか“おもらし”の処置は、保育者にとつて、幼児とのかかわりにおいてあまり歓迎されないことの一つではないかと思われるのである。

たしかに、保育中における幼児の“そそう”は、その処置のしかたがどうであろうと、一方においては、そのために保育を中断するということになる。しかも、そのようなときは、案外、保育がうまくいっていて、保育者がいろいろな意味で手をかけてやりたいことの多い時間であったり、保育者が前面に出て指導している学級全体の活動の最中であつたりする場合に多いということも事実であろう。そのため、保育の流れとあいまって保育者にとつては、どのようにすればよいか、きわめて強い決断を要するといふことになる。

しかも、このことが幼児にされると近くにいる幼児たちの中には、その事実に対して、決して同情的ではないものもいて、

「先生、この子の坐っていたとこ、ぬれてるに、おしっこした

に」

「先生、くさいわ」

「先生、○○ちゃん、うんこしたとるに」

などと、はやしたてたりすることもある。

このようになれば、どっちにしても保育はできないということになってしまうのであるから、思いきって保育を中断した方がいいということになる場合が多い。そして、前回でものべたように、“保育者のいる場所を幼児にはつきり伝え”て、他の幼児たちに安定感をもたせ、その幼児の処置をするのが、やはり得策だろう。

他方、これを幼児の側からみると、幼児が“そそう”や“おもらし”をするときは、案外に、活動に集中しているときや、学級全体の活動のときなどのように、緊張を伴う活動をしているときが多いということである。そのため、“そそう”をした幼児にとつても、きわめて強い失敗感や挫折感に悩まされるとともに、ときには、これまでの家庭でのいわゆるしつけの影響から罪悪感をもつ幼児すらいる。もちろん、年齢によっては結果としてそれくささなどが手伝ったりして、きわめて不安定な状態となるだろう。

そのため、幼児たちはいろいろな反応を示す。ある幼児は顔が

青ざめて放心状態のようになって、そのまま啞然として立ちすくんでいたりするだろうし、また、ある幼児は恥ずかしさが前面に出てしゃがみこんだりするというように、幼児によって、いろいろであろうが、しかし、このような幼児たちは、保育者に対して、きわめて強い援助を要求しているということも事実であろう。

(3)

だから、保育者は、まずこのような幼児の感情を受容してやる必要があるろう。

「がまんしてたのね。気持が悪かったでしょう。先生が今すぐとりかえてあげるわね」などと、幼児にやさしく語りかけてやることのできる保育者はすばらしいと思うのである。でも幼児の中には、失敗したということで泣きじゃくったり、反抗的な態度に出ることもある。もし、保育者のいうことばが、口さきばかりで、誠意が幼児に感じられないような場合はなおさらである。

いうまでもなく、平素の保育の中での保育者と幼児との信頼関係も、このような場面では、とくに大きく影響している。だから、口先ばかりでは幼児は動かないし、もし、そのようであれば、保育者は平素の幼児との関係について反省すべきである。

とくに、保育者が、このような幼児の感情を無視して、

「あなた、また失敗したのね」

「したくなったら、先生にいわなくてはだめよ」

「こんど失敗したら先生しらないから」

などと、「そそう」に対して否定的な感情や言動をみせたりすることがあれば、それが幼児にとって、きわめて強い危機的な場面であるだけに、幼児との信頼関係や人間関係にも、大きな影響を与えることはいうまでもないし、このような保育者の行動は論外である。

しかし、保育者との人間関係がうまくいっていれば、保育者の暖かいことばや態度、保育者の目をみて安心した幼児は、やがて、保育者のさしのべる手にすがって、その場から動き始めてくれるだろう。

さて、幼児が「そそう」をした場から動き始めてくれれば、前述のように、他の幼児に行き先きをはっきりして、幼児と手をつないだり、肩に手をやったりして、幼児との身体的接触を保ちながら、処置できる場所へ誘導すべきである。

この間にも、幼児の情緒が安定するように、「すぐに着替えてあげるからね」などと話しかけてあげることもよいことであろう。

(4)

着替えは、残って待っている幼児のことも気がかりではあるうが、それは、やはり担任の保育者がしてあげることが必要である。このような場面での幼児との接触や世話は、その幼児にきわめて強い親近感や信頼感をもたせるといふことになる。

つまり、「そそう」をする幼児にはどちらかといえば、一般的には、園での安定感があまりなかったり、保育者との信頼関係のうまくいかなかった幼児に多いからである。だから、幼児と一対一の親切的な世話は、その幼児との人間関係を深める、きわめてたいせつな機会といふことになる。

そのためには、幼児の衣服をしまつするとき、いかにもきたないものに触れるかのように、指先でもったり、何かにつつんでもったりするということも、幼児に不安定感や不信感を与えるといふことになることはいうまでもない。

いずれにしても、このようなことが原因で、その後の園の生活において、幼児が元気に生き生きとしてきたといふことも、きわめて多くあることだし、また、「そそう」といふことそのものもなくなつたといふことも多いのである。

さらに、幼児に、

「先生がきれいに洗ってあげるからね」

といつて、時間があればその場で、また、時間がなければ、洗える状態にして、

「もう、大丈夫、先生といっしょにお部屋へ帰りましょう」

などといつて、幼児の情緒をさらに安定させてやるべきである。幼児の中には、保育室へ帰るとき、ひとりではどうも気おくれのする幼児もいるのである。

そして、衣服の乾きしだい、幼児に丁寧にたたんで美しいものを返してあげるといふこともたいせつであらう。

いずれにしても、「そそう」といふことは、保育者にとつて、決して楽しいことではないだろう。でも、そうだからこそ、それに対する保育者の反応は幼児に大きな影響を及ぼすといふことになる。

このようなときにこそ、幼児とともに生活している保育者の真髓がみられるのではないかと思うのである。

(暁学園短期大学)



保育における子どもの「自由」

大場 牧 夫



○「自由」乱用

「自由保育」「自由遊び」「自由表現」「自由画」そして「自由」のびのびと……。幼児教育―保育―の世界は、大変「自由」ということが好きなようである。保育はその教育の理念として、子どもの自由を大切にしていくのだということ、このように表現しているとすれば、それはよくかみしめてみなければならぬことだが、皮肉な見方をすれば、あたりまえのことで、このように、「自由」「自由」と看板をかかげる裏は、かなり「不自由」な思いを、子どもにさせている面があるのではないかと想像するのである。

いったい、「自由保育とは何なのですか」「自由遊びとは何なので

すか」「自由表現は」と問いつめていった時、「自由」という看板に偽りがあるのではないかと思うこともあるのだ。そこには、保育者、教師の自己満足的、あるいは独善的状况さえ見ることもあるのだ。つまり指導する側は、「自由」ということはをつかっているが、子ども自身はさっぱり「自由」になっていないということであり、また「子ども自身にとって『自由』になるということとはどういうことか」という点について、十分に検討していない状況があるのだ。

○形態ばかりの「自由」

私の園に見学者がくる。その日の主活動が「遊び」であると、「先生の園は「自由保育」をしているのですね」といわれる。また別の見学者が、グループ活動が中心の日にくる。「先生の園は『集団主義保育』をしているのですね」といわれる。そして、一斉に課題に取りくんている日を見学した先生は、「やっぱり学校といっしょの幼稚園で男の先生が指導すると『学校的』ですね。『一斉保育』をしているのですね」といわれる。

『自由保育』『集団主義保育』『一斉保育』その他「誘導保育」……etcと、何とか保育ということばで簡単にかたづけられてしまう。研究会の席でもしばしば「自由保育」「一斉保育」とい

うことばを耳にする。けれども、このことばをつかいながら、何をイメージとしてもっているのだろうか。どうも私の園の見学者や研究会での発言から考えられることは、「保育の形態」と「保育の内容」をいいかげんにとらえて、「自由」だ、「一斉」だといっているように思えてならない。そしてとくに、見かけ上のかたち―保育の形態―によって「自由」であると判断している場合が多いように思うのである。

「自由保育」の本山は、お茶の水女子大学の幼稚園だという。おそらく全国から見学者もくることだろう。そしてこれは私の推測であるから誤解もあるかも知れないが、もし「自由保育」という教育理念にもとづく実践が展開されているならば、それはただ単なる「自由な形態で行なわれている保育」と理解してしまうこととは望まないことだろう。しかし果して見学者の何パーセントが「教育理念」、「教育の内容と方法」としての「自由保育」を理解して帰るだろうか。

私の園で、昭和三十年の創設一年目の一学期に、「自由保育」なるものをした。そして半年もたはずしてお手あげになった。それはなぜだったろうか。今にして思えば、形ばかりの「自由保育」しかできなかったからではなかったかと思うのである。私自身も新任であり、その時、なぜ「自由保育」をするかということ

を考えるゆとりもなかった。つまり「保育における自由」を意識できなかった。単なる模倣的実践にすぎなかった。そして現在は、この「保育における子どもの自由」という課題を意識している。それは少なくとも、「形態」のみの問題ではない。「保育の形態は、目的、目標、内容と、子どもの状況との関わりによって選ばれるものだ」と考えている。

「自由」であろうと「一斉」であろうと、保育の形態を先行させたり、固定化して展開する保育の実践は、形態のために目標や内容が考えられ、形態に適合するように子どもに行動が要求されてくる危険をはらんでいると考えるのである。

○「自由遊び」の「自由」

「自由遊び」ということばは、これまた保育界独特のことばである。「自由遊び」ということばがある以上、どこかに「不自由な遊び」があるに違いない。おそらく、このことばの発生には、「保育はすべて遊びを中心に展開される」という考えがあるのだろう。「汎遊び論」とでもいったらよいのかも知れない。そこには保育者、教師の課題設定も含まれているように思う。「不自由な遊び」がそこに認められる。具体的に、「リズム遊び」が代表として挙げられる。「遊び」というのは看板だけで、子どもは「遊

び」とは感じていない。「リズム強制労働」みたいな現実がある。「楽器遊び」「ねんど遊び」何にでも「遊び」がつく。しかし子どもは遊んでいるとは思っていない。

これは私の園のある時期に、「すべては遊び」の考えで実践していたことがあった。「きょうはねんど遊びしましょうね」しばらくねんどをいじっていた子どものひとりが「センセイデキタヨ。モウアソンデキテイ」このひとことで、「何でも遊び」の考え方は消え去ってしまった。

その昔フレーザー先生は、「遊びは幼児が自由と喜びと満足をもつ自己表現の活動である」というようなことをいったそうだ。「遊び」ということ自体、本質的に「自由」であることだ。その考えからすれば、「自由遊び」ということは、保育が本当に子どもの遊びを理解し、保障していない証言みたいな気がする。

私の園では現在、「自由遊び」ということばはない。まさに「遊び」といつている。そこでは教育の条件の中で最大に自由である「遊び」の時間と空間と内容が保障されたものでなければならぬと思っっている。

○「自由表現」「自由画」の「自由」

「自由」のびのびと表現する「ことをねらったとしても、それ

に比べられる子どもはいいが、中味も表現のすべも持たない子どもにとつて、こんな不親切な指導はない。問題は、「いかにしたら子どもが身体で自由に表現することができ、またそれを楽しむことができるか、いかにしたら描くことの楽しさを獲得することができるか、という点にある。

「自由画」において、よく子どもはチューリップ、お人形のような女の子、ジェット機や怪獣の絵を描く。描くといっても、そこに逃げ込むといった方がいい。それを自由にしていてもいい。「そのうち必ず別な絵を描く時がある」という考え方もあるだろうが、子どもの表現が内容的に乏しいのか、表現の技能において不安があったり、知らない状況であるのか知る必要がある。

「自由画帖」というものがあるが、この画帖が子どもの描く自由をどれだけ満足させるか検討してみる必要がある。

ここで考えなければならぬのは、「自由」とは「放置」された状況ではないということ、「自由にする」ということは「自由放任」ではないということである。幼児なりの知識や技能を、しかも幼児が主体的に獲得していく上に保障される「自由」ということを考えなければならぬと思うのだ。そこに当然「自由に表現できるための指導」があると思うのである。

○「斉保育は」「不自由」か

確かに従来の「斉保育は、子どもに不自由な思いをさせている」といわれる点が多い。特に「日本人的教育」は、「斉保育で画一的に進めていくことに教育——保育の徹底した充実感を感じ、効果のあがるような傾向をもっているように思う。

幼稚園や保育所の教育を、学校教育に順じさせたいという方向づけは、「「斉保育」から子どもの自由を追い出すことに拍車をかけているように思う。しかし、すでに述べたように、「「斉」とは形態である。本当に子どもの「自由」を大切にする教師・保育者であるならば、形態が「斉であろうと自由であろうと、子どもに自由を獲得させることがなければならぬ。

小学校教育においても、「解放されている子ども」「自由な学校」ということがある。また「授業における緊張関係」ということはある。この「緊張関係」とは、先生にしかられるからと緊張している状況ではない。子どもと教師が学習の目標と内容に、主体的に取りくんでいる状況がつくり出す、張りつめた関係であり、そこでは子どもの主体的、創造的思考と行動が展開されている。

保育における「「斉」で、「緊張関係」の状況とは違うかも知れないが、幼児なりに設定、提示された課題を、自己の課題とし

て受けとり、そこでの行動に「自己目標」がなりたっている場合など、「自由」な心の働きをもった「斉指導」という状況が存在するように考えるのである。

○園生活で「自由」である子ども

理念、目標、形態、方法、内容、等々、私たちは、これからの幼児期の教育を考える上で、「自由」の再検討を手がかりにする必要がある。それは単なる形態論でもなく、方法論でもない。一つの幼稚園や保育所において、どのような生活が展開されているかという問題になる。

園生活が子どもにとって、仮り住いのような状況である場合、そこが単なる小学校就学のための準備教育という路程に過ぎない場合は、そこに「生活する子ども」は存在しなくなる。園生活で子どもが「自由」を獲得することは、生活主体者となることである。園生活は「自分の」生活の時間であり、場である。また「自分たち」の生活の時間であり、場である自覚の強さが、その園生活に、そして子どもたちに存在する「自由」を証しするのではなからうか。

「保育における自由」の問題は、一つの園の教育理念と教育構造、それに依る実践に関わるのである。
(桐朋学園幼稚園)

うっかりしている時

その人の味はうっかりしている時に出る。

うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。

教育の一番ほんとうのところは、しばしば、その人のもち味によって行なわれる。まして、相手が、いわば、最もいい意味で始終うっかりしている幼児たちである場合、我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上であらう。

うっかりという言葉、うっかりする動作、出あいがしらに、うっかりと見せる顔。その時出る我々のもち味こそ……

と、いって、いくらいもち味の人でも、うっかりばかりしてはなるまい、と、いってまた、わがもち味をつつもうとして、うっかりしている時の全くないのも、つくろいに過ぎよう。そこでこそ、幼児教育はむづかしいものと、昔も今もいわれるのである。

——倉橋惣三選集第三卷『育ての心』(フレーベル館)より——

うっかり笑って

西野 紀代子

保育室で五歳の男の子が古新聞をまるめて刀を作ろうとしている。見るともなく通りすがりに目をとめると、意欲的なその子の気持とは正反対に、まるでなまこのように、グニャグニャの刀ができているのを目にする。「ウフフ、」大人は思わず手を口に当てて笑ってしまう。(笑ってはいけない、と思う心が、手を口に当てさせている。)けれどもその瞬間子どもが眼を挙げる。

「アッ、先生笑った。僕のが下手だと思ってるんでしょ？」

「ううん、そうじゃないの。下手だと思ったんじゃないけど、刀ってピンとしているじゃない。〇〇ちゃんの刀、あんまり違うから……」

弁解してみるけれど、一面ヒヤリとしている。理屈で子どもを納得させまい、と思いつながら、自分のしていることは、やはりそれ以外ではないように思えてくる。

「先生、おたまじゃくしが、バラの花びら食べてるよ」

ある日、見学していた四歳児の保育室で、突然見知らぬ子ども

が、私の手を引つ張った。

「エッ、ほんとう!?」

バラの花びらつて素敵な味がするだろう、味ばかりではなく、匂いもいいし……と思いつながら、案内されて水槽の前に連れていかれた。水槽の横に置いてある花瓶の淡いピンクの花びらが、水の上に散っていて、小さな黒いおたまじゃくしが、花びらの一隅を口に含むような形で、口をバクバク動かしていた。静止している花びらと対象的に小さい黒い口がよく動いている。

「ほんとう!」

こんな小さなシーンに、生きている、ということを感じとったのでもあろうか。小さな黒いおたまじゃくしの動きに、私の心も揺すぶられて、子どもの驚きの気持ちに同感してしまう。私の目を見て、ニッコリ笑うと子どもは、跳ねかえるようにいってしまった。

「あなた、なに言っているの。おたまじゃくしがバラの花びらを食べる筈ないでしょう?」

いっしょに見ていた友だちの言葉がとんでくる。はて!! 女の子は、おたまじゃくしのたべものを、バラの花、と感違いしたのだろうか? えっ!! いえ、あの子の驚きは、何に對してだったのだろう。ふと考えてみる。私たちは、うっかり感覚的・情緒的

に単純に子どもの感情に迎合してはならないだろう。しかし、子どもの新しい発見に動かされるものが、そこにあったらすると、「ワァ、ほんとう!」と驚いている時点では、子どもの気持と、ひとつに流れあうものを感じている。それは、もう現象や客觀的事実の奥にあるもの、といつてもいいのではないのだろうか。

倉橋先生の伸びやかな名文の深みは、到底汲み尽くすべくもないけれども、先生の書いておられる、その人のもち味というものを自分なりに考えるとき、それはなにかこう安定してその人の中に備わっている、というものではないように思われる。ある日、ある時、あることが起こる場合に、その人からでなければ生まれでてこないような感性、そうしてその内容のあらわれが、ごくごく短い一瞬に過ぎなくとも、受けとった側の子どもの人間の、一生を変えるほどの影響をもたらす場合もあるのであらう。そこは全くの無手勝流であるだけに、子どもの前に生きていることの内容を深く問われる思いがするのと同時に、うっかりしているときだけに、こちら側の人間のまるごとが子どもの前に受けとめられているのであらうと思うと、ある種の畏れを感ぜしめられる。

(所沢市立第二幼稚園)

ある日のできごとから

——うっかりしている時——

光木 美子

天気の良い五月のある日、私はこんな体験をしました。

砂場は全面が水びたしになり、海になりました。男児たちは裸足になり、上半身裸になり、はしゃいでいました。クライマックスが過ぎ砂場が静かになると、私は男児Mを誘って裸足になり、海の中に入り、なま暖かい泥水を手足で快く感じていました。すると、「作戦だ！」という声がちらっと聞こえたかと思うと、私とMはドバツと、泥水を背後からかけられたのです。私はびっくりしてふりかえると、男児Tがにやにやしながら立っていました。なんだろうと思っていると、またもや大量の泥水をバケツにすくい、私とMにかけました。私はその時、自分にかげられたことよりも、Mのことがとっさに思われました。ああ……今日はじめて、はじめて、Mは泥水の中に入ったというのに……Mの活動がとぎれはしないかと、そのことが気になったのです。「どうして？」とTに尋ねたりしているうちに、またTは泥水をかけました。私はムラムラとしました(恥しいことに)。しかし同時に、

私は頭から泥水を浴びていたものの、むしろ冷たく快かったの
で、いっそ泥かけっこにしようと思いつきました。そして、「よ
ーし、私もかけちゃえ」と足で泥水を加減しながらけると、Tの
足にかかりました。するとどうでしょう。Tは急に顔色が変わり、
声をあげて泣き出してしまいました。私はびつくりしてTの前に
立ちつくしました。「どうして？」とも理由が聞けず、複雑な気
持ちでTを見つめているだけです。しばらくするとTは泣き止
み、近くにあったテンプルに、クレヨンでギギーと鋭い線を描く
と、サーと私の前を去って行きました。Tの気持ちは、なぐり描
きの行動で解消されたようですが、私の気持ちはすつきりしませ
ん。そばにいたもうひとりの男児は、「先生(私)が悪いよ。先
生はがまんするもんだから。先生が水をかけなかったらTちゃん
は泣かなかったのだから」と言います。……おかえりの時、私は
Tに、「さつきはごめんなさい」と言ったら、Tは、「うん」と軽
く言うのと、私の顔も見ないでさっさと帰って行きました。

その後、私はもう一度この出来事を思いかえしてみました。ど
うしてTはあのように豹変してしまったのか。私が「よーし、私
もかけちゃえ」とTに向かっていった時、Tはどのように感じた
のだろうか。私は、Tが最初水をかけたことを受けて、かけかえ

そう、かけっこの遊びにしようとなりました。しかし、Tにとつては、大人がきびしい顔をして、自分に向けて泥水をひっかけるなんて、がまんのできないことだったので。私があの時うっかりとTに見せた顔、また感情が先走ったあの行動が、Tにどのような映ったのかを思うと、恥しい限りです。落ち着いて考えれば、私にTの行動をもっと柔軟に受けとめる余裕があったなら、また、Tの日頃の様子を掴んでいたなら、あんな風にはならなかったと思います。

ともあれ、うれしいことに、この出来事があってから、Tとの間がしっくりといくようになりました。それまで私は、自分を存分に出している五歳児と、どのようにかかわっていいか、その手立てを掴みかねていました。それ故に、子どもたちとのつき合いが、何か表面的に終わっているように感じられていました。ところが、この日の泥水をかけるという粗野な行動から、私自身の殻が打ち破られ、地で子どもとぶつかることの大切さを私は教えられたのです。

倉橋先生は、うっかりしている時にこそ、その人のもち味が出るとおっしゃっています。実に深い意味が含まれていると思います。子どもと保育者のふれ合いにおいて、思わず知らず現われ出

る姿や行動の中に、人間のそのままの姿があり、教育があると教えて下さっています。私はというと、うっかりして何かをやらかした後、あわててとりつくりうこともあるし、また、うっかりしていることすら気づかずにしてしまっていることもあります。しかし、その後自分の保育をふりかえった時、うっかりした時の行動が、それまで気づかなかった自己の一面を照らし出してくれ、大いに反省させられたりします。また、うっかりしていたが故に、思いがけない子どもとの出会いが成立したり、思いもよらない楽しい遊びに発展したりもします。

保育は普段の自分がまるごと出ます。こんな自分をあからさまに子どもにぶつけるなんて、「こわいなあ」と思う一方、それ故にまた、常に自分が包みかくさず現われ、自らが教えられる場に置かれていることを思うと、やはり「ありがたいなあ」と思わずにはいられません。
(まんとみ幼稚園)



倉橋先生と共に



田坂 ユキ

生命にみちみちた幼児と、永い年月いっしょに語り、いっしょに遊び、走りまわった春の日の園庭、粘土工作に夢中の時間を過した身の幸福を謝しつつ、五十年の永い日々この道に進み、その間、倉橋先生の保育の原理を、子どもたちの上に一心に考え、幼児といっしょに数々の遊びを創り出しました。子どもと思いきり楽しめなかった迷いの日、そんな時は、先生の温厚なお顔を思い浮かべながら……。

あらゆる可能性を持つたくましい姿、その一人一人の持つ強い発達の可能性の邪魔をしないように、伸び伸びと育つことを助ける仕事、保育者の大切な行く道。幼い人たちの友だちとなるための第一の大切なものは、その保育者のいきい

きしさ。このいきいきしさをなくして、子どものそばに居るとは、罪悪であると、重ねて先生は常に申されておられました。

どんな美しい感情も、正しい思想も、いきいきしさの欠けておるものは、子どもの生命そのものを鈍らせずにはおかない。いきいきしさの抜けたにぶい心、子どものそばには、この位存在の余地の許されないものはない。一瞬一瞬、子どもの心を触み、生きる力、伸びる力もうすれさせる。

「おや、この子どもに、こんな力があつたかしらん」と絶えず驚きながら、それを詠嘆するひまも、すぎまもない程に、こまかい心遣いに忙しいのが教育であり、幼児教育者です。絶えずまめやかさのある人が、幼児教育に貴重な保育者です。休む暇もなく気配りし、目と手と足も絶えず働かせている人、ちょうど園芸家に似た忠実さで、心も身体も共にまめやかな人、子どもの遊びに引きつけられて見入っていられるような人、そんな人ならば、子どもの嬉しい先生です。

まだまだ、幼稚園で、生活あそびの指導が充分でなかった、昭和十二年の九月に、倉橋先生をお迎えして、四国四県の幼稚園の先生方が、幼児の生活あそびについてお話をうか

がい、みんな、勇気づけられました。

自己充実を目指す遊びの状態から、自由遊びに、生活あそびにまで高めて行く、その段階において、個人から集団に、その生活を高め、方向づけて行つてはじめて、満足した遊びに入つて行く、その遊びが生活あそびの指導だとお教え下さいました。

終戦後早く、及川先生、堀合先生の御指導で、遊びについての内容や、技術の実習をし、いよいよ教師の内容的方面の豊かさが、遊びの相手に役立つことを教えられました。

残り少ない私自身の人生の終りの日まで、あか
るく、まめまめしく、いきいきと、子どもたちの
遊びのお相手が出来ますよう、惜しくも早く逝か
れました先生方が、遙かなかなたから、微笑しつ
つ見守っていて下さると、深く信じて、念じつ
つ、筆をおきます。

(昭安幼稚園)

← これは、倉橋先生が今治においてになった際にお書きくださったものです。

↓



私の保育

村石京子

保育者というものは、誰しも保育に対するある理念をもっていると思う。この理念というものが、保育における情熱とつながり、行動となり実践されて形をおこしていくのである。

ただ、その思うところがあまり強くありすぎると思理に走りすぎて、その求めているところが実際とはほど遠い空手形におわってしまったり、ある場合は教師のカラーを強く出しすぎて子どもたちを色づけしてしまったりすることがある。また、現実の子どもとの姿とはかみ合わないで、ただ新しさをたずねるような行き方となったり、あるいは几帳面に組みたてられすぎて子ども

の側は身動きがとれないような教師の自己満足的なカリキュラムが作成されたり、ある場合は教師の実験材料的に子どもが扱われたりすることがある。それでなくても、

自分の担任するクラスの雰囲気はどうしてもある程度はその教師の持味や個性で影響されることは、良い場合も逆の場合も避けられないものと思ふけれど、そのことで一人一人の子どもの個性までも押しつぶしてしまうような強い教師の色彩はあまりのぞましいものとは考えられない。しかしそうかといって、何ももたずに教育の場に臨んでよいものであろうか。何も考えずに子どもたちと日々を過ごすだけでよいのであ

らうか。そんなことでは教育の前進は見られないのではないだろうか。日々安穩に楽しく過ごせれば最良という程、保育とは単純なものではないだろう。

一人一人とふれあい、一人一人をいかす保育をということはよくいわれる。私もこれが大切であり、保育の基となる考え方と想うし、私どもの園の保育のあり方もこの心を根底としてなりたっていると考えている。しかし角度を変えて見てみると、一人一人がよければそれで全てよいのではなく、やはり年齢にあった全体的な指導というものも必要と思われてくる。また、系統だった教育のプログラムというものも軽んじられないとも思う。それなら保育の中でそのバランスはどのようにあつたらよいのであろう。確かに自分から考え、自分から創り出し、自分から行動する幼児の行動は活気があり、心があり、そして子どもらしい生き生きしさに満ちている。統制されて

鬱積した気持の代りに意慾がみなぎっている。しかしある場合には、教師の適切な教育的配慮にもとづくよりよい刺激によって、新しいあそびが展開されたり、かたよりのない経験をつみ重ねることが出来たり、新しいものの見方が出来るように成長することも多い。これが子どもたちをよりよく成長させていく教育というものだと思う。だが、その度合があまりに濃ければ、やはり子どもを引きまわしてしまふ結果にもなる。どのような場面での、どのような指導が、最も適切とされるのだろうか。

こんなことを考えれば考える程わからなくなり、日頃思い悩みながら日が過ぎていった。そして年度が改まって四歳児の一期を迎える日がきた。

今年はどうな子どもたちがこの級に入ってくるのだろうか。そしてどんな級が出来上って行くのだろうかと思う心は、これから幼

稚園に入園する子どもが、幼稚園とはどんなところであるかと楽しみであったり、一方不安であったりする気持と、立場は違

つてもどこか相通じるものがあるかもしれない。実際のところ、四歳児を担任することももう数回にはなるので、おおよその四歳児の概要というものはとらえることが可能であるけれど、それは今までの四歳児のクラスの子どものたちの中であって、決してこれから新しく迎える子どもたちの姿ではない。例えばトランプとか百人一首のようなものならば、はじめは個々ばらばらに見えていたものが度重なればすっかりその中味を知ってしまうし、次はこれとこれがあうというようなこともわかってくる。しかし、教育というものは年数を経ても決して以前の経験で今回がはかれるというものではないし、相手というものはその度に全く新しいのであって、以前のことからびったり重ねて考えるというようなことも出来

ないのである。これが教育というものの難しさともいえるし、うまみであるともいえるよう。

そして、そのスタートに当るとき私はいくつも考えていた。早くクラスのもとまりをもとうとか、グループでのあそびを展開させていこうとかするのではなく、とにかくあるがままの子どもを受け入れて、一人一人の心を知れることを今学期は自分の中心的課題としてじっくりとやってみよう、と。子どもにも新しい経験をとか、よい指導をという気持もあるけれど、これが先立つとどうしても概括的な活動の方に教師の目が向けられがちになり、子どもの心を見ることが弱くなる。ある活動を見ていてそのあそびをより発展的にやってみようとか、みんなの経験としてひろげようとかいう気持になっってしまう。何かプランを起こした場合も、順調ののってこない子どもがいると、その子ども達の心の中を思うよりもその活動に子

どもが早く参加することをねがってしま
う。しかし、もしかしたら子どもにとつ
て必要なはそんなことより、「ママ」っ
て呼ぶ代りに先生のそばに行つて「せんせ
い」とちょっと呼んで見ただけかも知れ
ないし、一しよに手をつないでほしいの
かもしれない。こういう子どもの心をくみ
つてあげることを忘れて、何かいそがし
げに動きまわっている教師は、子どもに遠
いものに見えてきて、その大切なスタート
で子どもは教師に向かつて心を開くこと
をしないで過ぎてしまうだろう。どの子
どもがどんな要求をもっているかを知る
ために、一人一人をよく知ることから出
発して、いこうと思つた。

例えば入園当初には、親から離れられ
ないで泣く子どもやあそべないでじつ
として泣く子どもがいる。親から離れ
るのをいやがる子どもはいつになつたら一人
だち出来るだろう。あそべないで傍観
している子ども

も何がきつかけであそび出せるだ
ろうと、この時期いつも私は困惑する
ことがある。そして泣く子どもを毎朝
こちらの手にひきとったり、あそべない
子どもにはあそびの仲間入りするこ
とが出来るとなると、あそびの仲間
に入らなかつては誘つて、あそびの
仲間に入らせる。そして泣いていた
子どもはやがて泣かなくなつて元
氣になり、あそべないでいた子ども
も、この間のあそびがきつかけに
なつて友だちとあそべるようになる
。すると一応「よかつた、Aちゃん
は泣かなくなつた」「Bちゃんもあ
そべるようになった」と教師を安心
させてくれる状態に見えるが、それ
がその子どもにとって最も適切な
処置であつたのだろうか。と私自身
問うて見ると疑問がある場合もある
。教師が無理につくつた場面はその
子がのぞんだものであつたのだら
うか。もつと個人個人の人格を大
切にするならば、泣く子どもを無理
に親から引きとつたり、はたして
やりたい

と思つていたかどうかともわから
ないあそびの中に安易に子どもを
入れこんで安心してしまふよ
うなことは出来ないわけで、も
つと子どもをゆつくり見守つて
あげるこのほうが大事なのでは
ないだろうかと思つた。

もちろん、私は担任の教師であつ
て、観察者ではないのだから、子
どもの状態をただ見守つていれ
ばよいのではなく、適切なとき
手助けをしたりアドバイスを加
えることが必要なのである。た
だこれにはよく子どもを知るこ
との基礎があつてこそ、その子
どもののぞむことが充分理解出
来るのだと思う。一人一人を大
切にする保育というのは、子ど
もが充分活動出来ればそれでよ
いではなく、子どもの人格を
かけがえないものとして大切
に扱ふ心からはじまるのだと思
う。

見せかけの安定やまとまりを求
めてあせてはいけな
いのだと自分自身に語つた。

このためだろうか、毎日十時過ぎまで母親とあそんでいたKちゃんが納得して親から離れるようになり、部屋の中央にじっとたずんでいたN子ちゃんがあそべるようになったのは、いずれも五月を半ば過ぎてからである。いつもよりその期間は長かかったようだが、いずれもあまり強くこちらからひきこむようなことはしないで過ぎた。水がゆっくりと流れていくような自然の動きであったので、ある日を境目としてというようにはつきりとした区切りはなかった。もっと早い時期にその折が得られるように教師が手助けしたのと、このように自然に子どもの成長を待って来たのと、どちらの方がよいかは、まだ私にははっきり言い切る自信はない。

またこの子たちとは違って出だしは大丈夫であったのに、五月病にとりつかれたように幼稚園がいやになったF子ちゃんや、急に心細さがつのって「何だか涙が出ちゃ

う」と泣いていたSちゃんもその後をのりきって、やっと現在は明るい表情を見せてくれるようになってきた。そして幼稚園の庭の山までクローバーをつみに行っては、クローバーの咲き揃ったマットにねころんで「いい気持の幼稚園、大好き」と言ってくれるようになった。やはり待っていてよかったのだなと思うことも多い。そして一学期も終りに近い現在の子どもたちを前にして、私は今こういうことをのぞんでいるのである。

先の子どもたちとは別に、クラスには元気がありすぎてにぎやかだったり、調子にのったりする子どもたちがある。この子たちの旺盛な活動力、たくましいエネルギーをだんだんと深い創造力、あそびへの工夫に向けていきたいとねがっている。これによってあそびそのものの発展やたかまりもある。そしてそれ以上に今思うことは、あそびの中でのルールを守り、自分の行動に

よって他へ迷惑をかけないようにすることを覚え、その心から次第に他を思いやる気持をもつように成長してほしいということである。

もちろん、伸び伸びとした、おおらかな、明るい子どもに育っていくようにとねがう気持は強いが、子どもの心の成長にはそれだけでは充分とはいえない。最近の親の年代が新しい教育を受けた時代の人たちとなつているためか、自分の意見などは比較的はつきり述べられるようになってくるのには感心することもある。しかしその反面、相手の立場にたつてものを考えるところということがどうも乏しいようである。そして親は子どもの鏡であるので、発表型の社会的な子どもが多くなっているが、自分だけければという行動をとる子どもも多い。これは何も現代の子どもだけでなく、自己中心性の強いものの見方、行動というもののはどの時代にあつても幼児の特性なの

かもしれないが、特に現代のように核家族の中で育っている子どもは、家庭の中で相手を尊敬したり、いたわったりという気が自然と芽生えていく環境にはないということも要因となっている。自己主張ばかり強い人間が多くなってしまう。人間社会の中に暖かみや思いやりのある関係が乏しくなってしまう。人の心の暖かさというものは、人が人とふれあうときおのずから学び得ていくものなので、お互い同志の影響も大きい。幼ない子どもの中にやはり優しい思いやりのある気持を育て、お互いの関係をまろやかに進めていきたい。今は級という小さな単位の社会ではあるが、その中で小さな社会人として一人前になるには、個人の主張や我を通すのではなく、言いたいことははっきりと言えるけれど、自分さえよければそれでよいというような気持でなく、相手のことも考えるというように心の成長があつてほしいとねがう

ている。幼児期は人格形成の大切な時期として、このことは常に考えているが、今年はこの相手を思う気持が幼ない子どもものにも通じてほしいと強く思うのは、軽度ではあるけれど障害のある子どもを担任するようになったからであるうか。日頃はこの子がこれから先、乗り越えて行かねばならない道のりを思つて、特別にいたわつたりするのではなくて他の子と同じに扱つていくつもりであるが、やはり身近に担任してみると、障害をもつ子どもの親の痛みがほんの少しだがわかつてきたようなこの頃である。

そしてこの子を含めて級の子ども一人一人が受け身でなく、自分で行動し、自分で考え、自分で伸びていこうとする力強いたくましい心と、優しさと両面をもつた子どもに育つてほしいとねがいが日々を送っている。

それにしても教育というものは、何年教職にあつても決してくり返して出来るものではないということは先にものべた。そして新しい子どもたちを迎えるたびに、「私の保育」というものは新しく生まれかわり、新しいものを形づくっていくものであり、教師自身もまた新しい子どもたちを教えてもらうことが何といると多いことであろうか。

そしてそう思えばなおさらに、日々の保育が、教師一人の与えることが中心になる保育によっては充分なものがあるうはずはなく、一人一人の子どものもつよい性格をひき出し、伸ばすことを教師は手助けし、それによつてお互いがお互い同志、子どもたちはもちろんだが、教師も一しょに学び育つて成長していきたい、そのような関係をもちたい、そのような教育をこれから進めていきたいと思うこの頃である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

◇ 講 演 ◇

母なる大地を求めて



周 郷 博

はじめに

ぼくは、世の中からちょっと孤立してみたい気持があつて、あそこへ行ったんだけど……このごろはいろんな人が来てくれるの。もうしょうがないから公開することにした、誰でも来なさい……と。このごろは泊まれるように二階を作りました。

引込んでいるということは、世の中から隠れている、ということではなくて、引込んでいるからこそ、世の中がどういうふうに動いているのかということについて敏感になっています。今週はメキシコのマリア・ベナビデスさんが中国へ行った帰りに、マルタさんという友だちと訪ねてきました。その前の前日にはヨハネスというなくなつた服部たか子さんのご主人と、たか子さんのお母さんが来て夜まで話しました。孤立してゐるわけだけれど、アメリカから招待が来たり、あそこにもぐり込んでゐるわけではないのです。

考えれば考えるほど、教育というのは難しいものですから、世界中がいま、「病める教育」などといって、いいかげんなことをいうのは罪をおかすことじゃないかな、と思います。なかなかわからないことに対して、忠告めいたことをいうことは、罪をおかすことではないのか、一時的に、自分は何か良心的に考へてゐる

ふりをして、生^{なま}平^{へい}可^かなことをいうことは、……これはだましてい
るのではないか、そんなこといいながらぼくは、本出ししたりし
て、何かいうつもりらしいね。(笑い)

本当に子どもを愛するということ

最初に、こういうことをいってみたいんですけれども……。

それは、家へ来たマリアさんと話したことや、ヨハネスさんが
興奮して死んだたか子さんの妹の子ども(一歳三か月)に対する
日本のお父さんやお母さんの態度について非常に強く、「あれは
愛ではない」といったりしたことがあるので、それから説明しま
す。

日本のお父さん、その人は東大を出てるんですけどね。その人
は、家へ帰ってくると、一歳三か月の子を高い高いなんかして……
……いいお父さんには違いなけれど、あんなふうに子どもを興奮
させて、そして子どもが喜ばばいい、という考え方に、ドイツ人
として育ったヨハネスは疑問を持つわけです。その一つのことだ
けを考えても、「子どもが喜ぶからいい」、玩具なんかでも、まだ
一歳三か月なのに機械でなんか動く玩具をたくさん与えていると
いうことに疑問をもつというより腹を立てているんです。そうい
うふうでは、子どもの体と心が育っていかない。刺激にまいつ

て、刺激に溺れるだけで終わってしまうじゃないか、つまり創造
的にならないというんです。ところが日本では、そういうことを
いうと、たとえばその東大出のお父さんに、憎まれちゃうん
です。

これを皆さんはどう思いますか？ 何でもないことのようにす
けれど、幼稚園でも、「子どもが喜ばばいい」というやり方をし
ていませんか？ それは、ヨハネスがいったように、大人たちが
子どもに示すべき「本当の愛」じゃないんだ、ということをい
たいと思います。そして、そういう間違いを、ぼくたちはやって
いるのではないか、ということを考えてみようではありませ
んか。テレビの子ども番組なんかも、日本のは本当に低級です
ね。人寄せ、ちょっとうまいことをやっている、というだけで、中
からいえば非常に低級です。

前にぼくが園長をしていた時、ドイツの教師が訪ねて来まし
た。その人が、幼稚園の部屋を見て「玩具が多すぎる」といいま
した。ところが外国人だから、失礼なことはいけません。あの
ね、外国人にほめられたからっていい気になっちゃいけないの。
外国人は礼儀を知っているから、じかには悪くいわないだけ
です。だから、ちょっとでも批判されたら、それをこっちで解釈し
て、あ、この人が考えているのはこういうことだ、というふう

考えるべきです。その時、そのドイツの若い教師は、「私の国では、赤や緑のあくどい色を使ったプラスチックの玩具は一つもありません」といいました。しかし、遠慮がちにいったこの言葉は、きつい言葉ですよ。そのきつさを感じないとしたら、日本人は非常に感覚が鈍っている。反省力がないということです。一つの言葉から、自分たちがやっていることは何であるかということを感じる心が薄くなっているんだと思います。

それから、もう一つ付け加えると、ヨハネスの話ですが、お父さんが帰ってきて子どもを必要以上にかまうといいました。しかしそれはね、昔は子どもが多かったからそんなことはできなかったの。ヨハネスはね、大人がそんなことばかりやっていると、子どもが早く大人びちゃう、不完全な大人になっちゃうというんです。子どもは、子どもの世界があるわけです。それを大人の世界が侵略してるんです。やはり二つの世界があると考えるべきです。子どもには子どもの世界があり、大人には大人の世界があり、これは協力していかなければならない。大人が子どものようになって子どもの世界に溺れ込んでいくのもいけないですね。子どもの方も、大人にチャホヤされて早く大人になっちゃうのもいけないですね。二つの世界があって、大人はだんだん死んでいくわけですけれど、そのあとをつぐといっても、また違う問題があ

るわけです、次の時代には。やはりそれを発展させていくように、だんだん時の流れと一緒に子どもの世界が成長して行って新しい問題を説明していき、創造的に生きるというふうになったらいいと思います。

中国のこと——マリアさんの話から——

ぼくがこんなふうに考えていたら、次の日にまたマリアさんが来ました。ぼくはあそこでびっこの山羊と一緒にいますが、何ていうのか、比較教育というのが、ドイツの人の考え方、メキシコの人の方と、日本のやり方をくらべて見ているような気がします。本の上の比較教育より、もっとおもしろいと思います。

マリアさんといろいろな話をしましたが、中国は、ただ普通の、見て歩くというお客を外国から入れないということでした。メキシコからの十四人は初めてそういう形で中国へ行ったのだそうです。それで、マリアさんが中国をどう見て来たかという話の中で、ぼくは一番日本の教育の間抜け具合、赤ちゃんの世界でも、幼児教育のことも、何か大人の自己満足で行なわれているように感じました。ぼくが幼稚園の先生たちを前にしてこういうことをいうのは非常に失礼なことですよ。教育の悪口を教師に向かっていることは、牧師に「神様はこの教会にいない

じゃないか”というのと同じで大変勇気がいることです。

マリアさんは、行く前から中国はいやだといっていました。行ってみたら、どこへ行っても通訳がつくけれども、早口で、向こうの人が説明するだけで、うるさくて、きらいだといいました。

中国の人は、毛沢東も、人民もみな同じように働いています。差別がないんです。男も女も差別がありません。全部集団の生活です。それはいいこと……だといっていました。そして暮し向きはたしかによくなったと、どこでもいっているわけです。しかし、どこへ行っても“中国は世界で一番いい”というのだそうです。

“私たちの国は外国から何もとるものはない”というのだそうです。でも通訳するのはスペイン語じゃないか、このスペイン語はどこから来たのかと思ったそうです。ともかく、中華思想っていうのはもともとそういうのらしいけれど、中国っていうものは最善だというふうに、毛沢東や周恩来がいているのじゃなくて……地方へ行けばそうだと思います。マリアさんはそういうところがいやだというんです。うんと意地悪く考えると、全体主義、キリスト教国でなくて神様はいないんですから、毛沢東が神様なんです。ほくは、マリアさんとはちょっと違って、今の日本には、明治天皇みたいな、もっと偉い人がいてくれたらいいなと思うんです。神様みたい……。日本には神様がない!!

(このあと中国の教育について話されましたが、九月号のマリアさんの話と重複するところもありますので省略いたします。)

マリアさんは、日本へ来る前に犬にかまれたんです。そして右の首がちょっと動かなくなったので、中国の病院へ行つたついでに、それを見せて“ハリでなおらないか”といったそうです。すると女の医師がそれを見て、五分ぐらい見ただけでなおらないといったんです。そしたらその夜の十一時ごろ、通訳の人がきて“あなたは病気だからすぐ入院しなさい、それではなければすぐメキシコへ帰りなさい”といったそうです。昼間に五分間、マリアさんの眼を見ただけでその女医さんは、マリアさんが病気だとわかったというんです。マリアさんはいろいろ変な想像をして、危険を感じちゃった? のね。もしついで行ったら切りぎざまれて食べられちゃうかもしれないと思つたといいました。それは善意に解釈すれば、疲れていたようなのでそれを治してくれようとしたのかもしれないと思えますけれど、何ね。しかしマリアさんは、そうは思わなかったらしいです。何しろ中国は恐しいと思つた。それでもなおかつ、中国の自然はとも美しい、そして日本にくらべて公害がないといいました。またそういう中国のいやな面も見た上で、教育のいい点も見いだし

た good thing だ、とマリアさんはいました。何でもないうらだけれど、本で読むより実感があって、中国と日本とメキシコをくらべてる感じですよ。

そして日本は、われわれの食べもの、着てるものは、世界との関係がちょっとでも切れたら、明日から醬油が使えない。納豆が食べられないというように、それほど世界にまきこまれていきます。世界の中の日本、としてわれわれの将来の進路を考えることが絶対必要です。日本がいいんだといふ気にならずに、比較が必要ですよ。そして、日本のどこが狭い考えで、どこが改められなきゃならないかを考えるべきです。改めるといっても外国の真似をするのと違って、日本人が本来もっていたものをこわしてしまっただけで、日本のもっている potential な能力として、どこを育てていくかという改め方が必要です。

ヨハネスやマリアさんが玩具を与えすぎるといったことと同じように、教育は年限が長ければいいということではないと思えます。中国は教育を短縮するという方向にいますが、日本でも教えることをもっと減らそうということがずいぶん問題になってますね。しかしそれは、教育の程度を下げるということじゃないんです。玩具と学科目と同じようなものだと思うんだけど、一歳三か月の子どもに刺激的な玩具をたくさん与えて、ガアガア

ワアワアいってれば子どもは喜ぶからいいだろう、なんていうのは間違いです。ということは玩具を取り上げればいいということではなく、その子にふさわしいものを与えようということですよ。

どれがふさわしいかと考えなければいけません。学校だって、教えなくていいんじゃないんです。教えることを減らそうということ、それから中国のように、学校に入っている年数を短縮するということを、日本人はほとんど考えていませんね。教えることをもっと集約的に、無駄をはぶき、簡潔にすることが大事です。それは玩具の場合と同じです。本当の玩具を与えないと同じに、本当に教えないならいことを教えないんです。玩具なんかまだいいけれど、数学なんかやたらにたくさんあるといやになっちゃうだろうと思います。

悩むことの必要

ぼくは今、二つのことをあなた方にいったわけですが、こんなことを聞いても、いたずらに悩むばかりですね。それよりももっとすぐたけになる話を聞いた方がいいです。でも、すぐたけになる話っていうのは、本当はためにならないんです。ぼくはあなた方に、悩む材料を今、与えます。自分にきびしくなる道に誘い込みたいと思います。日本はいま、経済的にガタンと落ち込みそう

になっています。第二次世界大戦で大きな打撃をうけて、そのあといくらかの人は立ち直りましたが、今度は突然また経済的にダメになったら案外人間は立ち直るかもしれません。でも突然そういう目にあうということは悪い方へ立ち直る危険もあるわけです。ですからあまりダメになる前から考えておいた方がいいんです。考えるということは、世界中が未来がないという今の状態（人口問題、公害問題、原水爆など）で一番重要なのは「人間」というものなのです。したがって、世界中が教育をどういうふうにしたらいいかということが最大の問題なのです。石油、経済、政治などの問題と一体のものにして、スエーデンの伝説の中に出てくるような「未来にかける虹の橋」をどういうふうにかけるか、（この虹についてのはやはり聖書から来ています）世界中が物質的なものでなく、精神的な未来を、今は求めている時代だと思えます。

ぼくは晶でいろいろ作っていますが、昨日梁瀬さんという人がテレビでキャベツの話で出ていましたが、ぼくのキャベツは梁瀬さんのキャベツと同じなんです。やおやのキャベツはだめなの、あれ食べてると骨がみんな変になっちゃうの。梁瀬さんのキャベツはいいんです。この人は本当はお医者さんなんだけれど、患者さんを見ていると食べている野菜なんかから病気がきているということがわかって百姓に変わっちゃったの。何か、有吉佐和

子さんの『複合汚染』に出てくる人だそうですね。

キャベツは、去年から育てたのが今、だんだん大きくなってくるころです。見てると、人間にもひねくれている人間があるけれど、ひねくれたやつはキャベツでもだめなの。味もよくないし堅いんです。よくまいてつやつやしているのがいいんです。近所の人に上げたら、今までキャベツを食べなかった三歳ぐらいの子どもが「周郷さんのキャベツ、もっとほしい」というようになって、（笑い）何もつけなくても甘い。梁瀬さんのキャベツと同じです。この間もぼくが晶にいたら、近所の子どもたちがきて「周郷さんの、パケツ（キャベツのこと）ちょうだい！」っていうんだ。（笑い）そのくらいおいしいのだと思って、ぼくは非常にうれしく思いました。

見わける力と持久力

今、休みの間に坂田信子さんにいろいろと中国人の話を書きましたが、マリアさんが中国人の親切を気味悪く思ったということの本当のことはわかりませんが、恐らくマリアさんが思ったのは違う親切であったのだと思います。本当にいい親切を、気持ちが悪く思うこともありますね。うわっつらだけの親切でばかに気持ちが悪くなっちゃうこともあります。これはだまされたんで

す。だから、勉強する場合も、何が本当によく、何がいけないのかということを見きわめることが大切です。教育のことなんかでも、何がよくて何が悪いのかを見わけるといのは、非常に微妙ですね。

梁瀬さんも、農業や化学肥料で有機質じゃないもので育てられたものを食べてると、病気にかなりやすくなつて骨が弱くなつて、持久力のない人間になる、といい、もうそういう状態になつて、持たない人間になる。見わけると、節操がなく、一貫したものがなく、これがかけてるんですね。節操がなく、一貫したものがなく、それでは何かやりとげるといふ喜びがないもんだから顔がだんだんひどくなるんです。梁瀬さんも、顔見ただけであなただけという野菜を食へて、つてわかるそうです。ぼくもそんな気がします。われわれの心の食べ物もね、変なものばかり食へてると、顔見ただけでわかるようになってしまつて、ぼくもそんな気がします。今日は本当は違う話をするつもりで来たんですけど(笑い)もう少し梁瀬さんの話をします。

豚なんかでもね、豚の食へるように作られた、つまり汚染されたもの、とそうでないものを見わけるといふ。外へ出すと牧草を食へないで、雑草を食へるんだそうです。ぼくの家の山羊もそうですけど。動物はちゃんと鼻でかぎわけるといふ。日本人みた

いに、テレビを見て「あれを食おう」なんていうことはしません。(笑い)日本人は鼻がきかなくなつたんだ。家畜、チャボなんていうのは何でも食へちゃいますけれど、人間は今や家畜化されているんです。人間は、家畜化されればされるほど、判別ができなくなるんです。判別ということは非常に大事ですね。そういう意味では、イギリスの「裸のさる」を書いた人が次に書いた「人間動物園」とか、安部公房の書いたもの(箱の中)にも人間が動物園の動物のように入れられた状態が出てきます。サン・テ・グジュペリもそういうふうを考えていたようです。「人間がもう何も何もない、都市の中で、人間は生活を失っている」といっています。人間が家畜化されているといふのはたしかです。そして判別力がなくなり持久力がなくなり、食物が変になり、教育も変になつてしまつて、だからぼくは、動物から学ぶことが非常にあるように思います。植物から学ぶこともたくさんあります。生命というものの原型なんですから……。人間はその延長線の上で考えるようになったんです。

「母なる大地」を作る

次にいおうと思つているのはちよつと夢のような話です。

鳥をやつてますとね、自然の季節も昔と違つて春になつても春

らしくもなく、春風が吹いてきたという喜びもなく、じくじくしている内に初夏みたいなものになってきました。作物の育ち方もおかしくなります。作物のはじめつていうものは何か弱いものです。最初、下に根がはってそして上に出てきます。それがあるところまでいくと、いやに自信のある姿になるのとだめになつてしまうものができます。それが今年はみんなだめになつちやうんです。堆肥がよくないせいもあるけれど……公害のために、農業のために大地が死んじゃった、ということとはよくいわれますね。ぼくの畠の大地も死んでるかもしれないので、これを生きてる大地にしたいと思つてやってきました。草刈りしたり堆肥を入れたり……これは時間がかかります。梁瀬さんのテレビを見てましたら、植物っていうのは、すぐに地面に埋めたらいけないんだそうです。地面の上に暫くおいている内に、バクテリアの働きで土に帰っていくわけです。まだ生のものを入れちやうとガスを出すんです。腐っていく前に。そして作物の根をいためちやうんです。出てきたばかりの根っていうのは白くて細くて、しかも上から見たものより数が多いの。それがしつかりすると根が張ってくるわけですが、それがこわれちやうと上がだめになつちやいます。

突然結論に行くみたいですが、大地は新鮮でなくちゃいけない

い、と考えました。肥料は必要です。しかし間に合わせみたい、肥料と称して不浄なよごれたものを入れちやうとることが多いわけです。堆肥は下手に作ると虫も育ちますから、ちゃんと大地にかえりませぬ。ちよつと教育に似ています。肥料をやった方が育つだろうと思うわけです。肥料をやらなきゃいけない。堆肥を作らなきゃいけない、大地が生きてこなければいけない。生命を育てる、母なる大地というものになっていかなければいけない。これは大変なことです。ぼくも一生懸命堆肥をひっくり返したりしてますけれどね、そうしている内に、肥料分は必要だけれど、土壌はもっと複雑なんです。すき間、中に空気がなければいけないし、固まつてる部分も必要なんです。固いところに根を張っていくのも根のはり、あい、です。この間も温室の親父さんと話をしましたが、長いこと百姓をやっているが、近ごろやつと気がついた。大地は新鮮に神聖でなければいけない、変なごみが入つたらいけない、”といつてました。下手な肥料をやつたらだめで、肥料は大地と完全に合つて、自然な状態で土に戻つてなきゃいけないのだとぼくも思いました。しかも少し大きくなつた作物や、オクラのように図々しい作物だと(笑い)いいんですけれど、初期の、一番弱い時には虫がつきやすいです。人間だつて、やる気のない、勉強する気(ぼくは勉強という言葉は好き)

やないけれど)のない、生きる気のない人がいっぱいいると、そこに早く虫がつくんじゃないかな。そして健康な人までむしばまれていくんじゃないかな。ということもあわせて考えますけれど、やはり中心になることは、大地は新鮮に、母なる大地、生命を育てる大地でなければいけない。特に初期は、まじり物が多かったり、間に合わせ、人間でいえば間に合わせ知識なんかをもった、不自然なお母さんじゃだめだ、ということ。大地と肥料はまじり合って、肥料などと見分けがつかないような、自然な母でなければいけない。聖母マリアは、こういうことの特徴で、ヨーロッパ人がえがき出したものではないかな、と思います。

母親は、殊に子どもが宿ってから四、五年までは、清潔で pure でなければいけない。モンテッソーリがいったような、母というものもっている特殊な本能というものと完全にまじり合った知識ならいいと思いますが、何か、欲と一緒になったような、生半可な知識は、根をおかす、肥料のようなものです。

というようなことを、温室の親父さんと話しながら、土地、土壌の renew ということについて考えました。昔は知らないでこういうことをやるのができたのです。今はいろいろなものがあるから、それで早く作らなきゃということ、変なものにしてみました。それでも(化学肥料でも)育つものはありますが、今

度はそれを食べた人の顔がおかしくなるということがあります。これは大急ぎで結論を出したみたいですが、そんなに間違っていないと思います。

ちょっと横道にそれるようですが、この間鎌倉へ行つて喫茶店でそれとなくその人の話を聞きました。話によると、その人はぼくの先輩、旧一高を出て東大の印度哲学を出た八十いくつかの人でした。その話がともおもしろくて、名前を聞きたいくらいでした。その話のひとつに、子どもを生むということに、本当に苦しんだ母の方が母親らしくなるといふことがありました。さっきも話したように、母親は母親らしく自然に運命をうけ入れて清潔で、そして生むために苦しむという、また生んだあとも、母親らしい清潔な心で苦しめば苦しむほど、母から子どもへ自力というものが伝わる。この自力というのは普通に使われているのであって、それはその人の一生を支配するものだと考えられます。あとになれば他力が入ってきますから……。

逆からいえば、今のようには妊娠が簡単にできる。そうすると母の苦しみはないわけです。そして教育ということも、自力を育てるようなやり方になっていません。ぼくの友人である東山魁夷さん、あの人のお母さんはずい分お父さんのことで苦しんだ人です。でもじつと耐えた人でした。だからこそ東山さんのああいう

「画ができたのだと思います。何か教育のようですが、教育におきかえてみてもそれほど間違っていないと思います。」

（このあと、今日のテーマは「幼稚園の行事」である
と司会者の方から説明がありました）

幼稚園の行事について

幼稚園の行事、特に運動会なんていうのは、……ぼくも園長の時、しょうがないから子どもがすつとするようなことをいおうと思ったりしましたけどね。もし、行事というものが意味をもつならば、戦後の日本の行事ではなくて、もう少し日本の国土にあった、伝統的なものをとりあげたらいいのではないかと思います。

伝統的なもの、それじゃあ三月の節供ならいいかといっても、あんまりワアワアいって……そういうことはかえてお節供にあわないんじゃないかと思いません。先生の方からいえば、お節供でもやれば、何かやったように見えるからかもしれませんが、そういうふうじゃいけないと思います。

幼稚園の行事だって時代が変わってきたんですから（ぼくはついにやりましたが）山へ行って三日泊って一緒に暮したんです。だんだんそれが一つの伝統になり、先生の方も子どもの方もいつのまにか、一つの流れを感じるようになったらいいと思います。

先生の方もやろうとしているんですから……。意義がある、と思ってやりますから。今、幼稚園でやっている行事は、意義があると思ってるんじゃないでしょう。＼お誕生会＼このお誕生会、いやらしいのよ。（笑い）暗いところで先生たちが何かして、ぼくもだけれど、お母さんなんかいねわりしてます。ということは、やってる人たちが、手段として間に合わせにやっているか、意義を感じているかどうかということです。運動会はやることになってからやる、やらなきゃならないからやる。ぼくはあんな小さい子たちが一生けん命走らされたりしているのを見ると、かわいそうになることがあります。あんな小さい子を、大人の手段にしたらいけないんです。小さな子がリレーの棒かなんかもって一生けん命になる。まるでネズミ競走かなんかみたいに（笑い）……ああいうことはやらない方がいいな。

やっぱり行事っていうのは、大げさにやるもんじゃなと思います。ぼくが子どものころを考えると、天神さまの森で、子どもだけでやりました。ほんの小さなグループで。その町だけは、大人たちが子どものやることをつべこべいわずに、子どもにまかしてくれました。そういう行事の方がいいんじゃないかな。行事について、といわれてもほかにはあんまりいうことないと思います。ぼくがこここの園長をやった時の経験で、＼お誕生会＼のつまら

なき、先生たちの変な芝居なんか見ちゃおれないの。(笑い) 大人の軽薄さを見せるだけで、あまり子どものためになりません。

子どもってというのは山羊やほかの動物と同じに、大人の心をパッと見て、「あれはうそだな」ってすぐわかるんです。子どもはつきあって時には笑ったりしますが、実は何も信じてないんです。

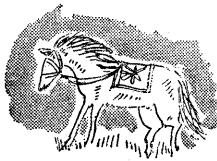
やるんなら、よくよく吟味して、考えたもの(人間だけでなく、自然との関係がはいって「生態学的」な側面と一つになったもの)をやるべきで、玩具と同じに、やりすぎるのはよくありません。子どもにやたらに軽薄なものを与えるのは……。テレビなんかでもたまにやる真面目な子ども向けの番組はいいです。たまにしかありませんが、やってる大人も一生けん命です。ぼくら子どものころの祭は楽しかった。その時に大人がひょっとこなんて踊ってると、大人は一生けん命ですよ。そうすると子どもの方も信じて見えました。今、もうそういうのはなくなりましたが、そういう時に大人の浪花節なんかありました。そうすると、大人が一生けん命だもんだから、子ども心にも何となく浪花節がわかりました。今のは全部子ども向けなんです。なぜそうするのでしょう? ふだん一生けん命保育してないからですか? 気になるから子どもをだまそうとしてやるのでしょうか。やるんなら、大人が一生けん命やりなさい」とぼくはいいたいんです。大人が

一生けん命かどうかを子どもは感じてるし、子どもも喜んでます。

幼稚園は子どもにサービスするだけでなく、こういう世の中ですから、お母さんたちが日常生活で、美醜が本当にわかるとか趣味を広げるとかして、お母さんたちが参加する場でなきやいけななんです。幼稚園はお母さんの教育も考えなきやいけないと思っ

てぼくは園長としてやってきたのです。

(五月二十四日にお茶の水女子大学附属幼稚園講堂で行われた「みどり会」主催の講演を取録したものです)



周郷先生の講演をきいて

さかたのぶこ

「周郷先生の講演をきいて」と云うテーマを頂いて二十日ほどになる。母の看病と仕事に明け暮れてつい日を過してしまった。

五月二十四日の研究会の日、母は既に病床にあり、代って父の命日の墓参に護国寺に寄ってから行くと先生は例によって演題とは別の話をしておられる。母親と、子供の自力。自家製のキャベツについても大地は母と同じである……等。孫を持つ身になってますますつる母へのおもいがふつふつと沸き、涙となって頬を伝った。

それから一か月余、その間に容態も次第に悪く入院、勤務先の厚意で午前は園に午後は母の為に過している。昨夜は病院で痛む腰をさする私に「明日の仕事があるから早くやすむように」と母はいい、今日も昼で帰る私にU君は「もっと先生と遊びたいな」と残念そうに見送って呉れる。八十二歳の母の生涯を考えたり、人のこころ、人と人とのかわりあいを大切に思う日々である。

私が保育界に就職したのはまだ三年前のことである。父と同年であり幼稚園時代の恩師である倉橋惣三先生のまず「自分の子供を大切に育てること」とのご助言や夫の仕事の多忙さもあって、幼児教育に関心は持ちつつながらそれまで仕事をしたことは一日もなかった。一九七〇年に夫が他界し、三人の子供も家庭をもち、それぞれに孫も恵まれたのを期に、父が私に遺した望みでもあったのでこの道に入った。これからまだ私にのこされている春秋があるなら、今までの私の人生経験をこやしとして幼なじみの仲間となり、彼等のために、とりも直さず私の為に心豊かな日々を過し度いと思っている。

このように経験を語るのは余りにも日が浅いが、周郷先生のお話を伺いながら思い出した四国での事をしたためてみたい。

人生の転機を計るために、私は住み馴れた大都会を離れて四国の小さな幼稚園に就職した。就職というより自分の気持ちを整理す

るためと地方の現状を見学に行くような気持ちで出かけたが、方言のゆたかさ、田植を間近で見ることの出来る喜びはあったが、余りの環境の変化にとまどう事が多かった。戦後間もなくの設立であり、質素堅実で、物資過剰な現在には実に貴重な存在である。

しかし入園式、遠足、誕生会、運動会、クリスマス、雛まつり、卒園式にいたるまで十年一日で、十年前に兄妹を通園させた父兄は「何をしているか見にこないでもわかります」という徹底振りであった。保育内容は「自由」という約束をまに受けて出かけていった私が無謀だった。行事すべてが周郷先生がいわれたように大人の側が間に合せにしている良い例で、誕生会は、二か月に一度遊戯室に全員集り、既製の誕生カードを贈り、各クラスから歌や、器楽合奏の披露でおわる。「こんなカードいらん」といって踏み付けた子のわびしいうしろ姿はどうしようもなかった。何度かの私の提案にも、高齢な設置者の意思は固く一年間同じ形ですづけられた。

行事ばかりでなく夏の風鈴から秋の菊人形のつくり方まで、頑強に伝統がまもられているようであった。

しかし二年目になると私の真意は理解され、カードも手づくりになり、ケーキも出て誕生会は子供達の何よりの楽しみとなった。誕生会はかりでなく、かなりの面をまかされたので、設置者

の気持を尊重しながらその土地にあった保育をうみ出していった。これからという時、東京の母がひとりになることになり、保育者である前に人間でありたいと、園や子供達、父兄には申しわけないことながら四国を引揚げた。其後も運動会の頃、卒園式と彼地を訪れ、いまだに親しい交りをつづけている。

三十余年振りに母の膝下に戻り面倒をみながら暫く勉強してみたが、私の師は幼児であると思えば再び仕事につくことにした。それがこの青い鳥保育園である。自由な時間のあるうちに幼稚園や保育園を見学したが、こもその中の一つであった。難聴児との統合保育をしているので保母の声も一段と大きく、給食、昼寝と一日の流れの長いことに神経が疲れ、興味はあったが母の世話をしながらではとても無理だと就職は考えてもみなかった。しかし私のどこかに障害児は子供の姿をよりよくみせてくれるということがあった為と思うが、ある時難聴児の父母会に誘われて再び足向け、その熱のある雰囲気にもまれて即座に引き受けることになった。夫を不治の病で亡くすことがなかったら、この父母の心にもなれなかったろうし、この子供たちと音楽を共にする決心は出来なかったと思う。クラスを担任させてほしいという私の希望で、四歳児を受けもち、二十四人中六人が難聴児である。

保育園というものはじめての体験であり、その保育に心を碎

くことはもちろんであるが、きこえる、みえるということが人間にとってどういう働きをしているのか、特にその成長期においての役目を考えこんでしまった。そして数十年前母校を訪れた三重苦のヘレンケラー女史の人間的なあたたかみとなにもものにもまけない健気さを、バラック建ての講堂のたたずまいと共にありありと思ひ出した。あの言葉とは思えなかつた彼女の声すらはっきりと——。

難聴児は現在日常の身の廻りの名前、挨拶、月日と曜日、天候、簡単な会話を、併設されている訓練教室で行っている。

「川は水が流れているものだといふのに、水道の口から水が流れてくるのをどうして川といわないの？」と三歳の孫が真顔で娘にたずねたというのをきき、難聴児がそこまで考えるようになるのは——と悩んだ日もあった。

しかし保育園であるといふこと、難聴児を含むといふことを意識しすぎた段階から、この頃、同じ幼児なのだと思えるようになってきた。そして四国るとき、抵抗を感じていた行事が、却っていつしかその大切さの身にしみるようになり、保育案を立てる上の重要な柱になっているのに気づいている。

園では第二土曜日が誕生会で、月番と週番の保育者が当番となる。誕生カードは全職員で考えたペンダント式で、りんごの窓を

あけると写真が出るという可愛いもの。プレゼントは各月思考をこらして、ある時は冠、ある時は壁かけと季節感をもちこみ、当番が腕を競っている。誕生会の近づく頃管理室をのぞいてみると良い。——寸暇を惜しんで熱中している保育者の姿があるに違いない。

この前の誕生会のこと、誕生児をひとりずつ花で飾ったみかんの段ボール箱にのせての入場、全園児（約七十名）の前を通る。赤ちゃん組から五歳児迄皆で頭をなで「おめでとー」「おめでとー」の連発。難聴児S君は大柄で恥ずかしがり屋、また新入児で団体にとけこみにくい園児であるが、その晴れがましい王子さま気分、うれしい中にもあまりが悪く、細い目がなくなりそうに、そしてもし箱に穴があったら隠れてしまいたいように、全身でその感激をあらわしていた。保育者が熱心であれば園児に通じぬはずはない。人形劇、紙芝居等の保育の出し物に、普通児はもちろん九十デシベル、百デシベルの難聴児も熱心にみとれている。「僕の誕生日はいつ？」「私のは？」と皆指折かぞえて楽しみにしている。この園はまだ去年五月の創立で日も浅く、いろいろ問題をかかえているが、若い保育者がやる気充分なことは未熟さをカバーして余りあると思っている。

保育園の特徴は、母親が働いているので一日の大半をここで生

活し、人間形成のかんりの面が委ねられていて、一日一日の大切さを思う。七夕、十五夜、豆まき等、家庭から忘れられていくものも、新しい感覚をいれなが子供の世界にのこしたい。

中秋の名月のお月見、夜ごとに変る月の形に興味を持たせ、やがて満月になればすぎ、かるかや、おみなえしの秋草。おだんごに柿、栗、さといもなどを供えて月の出を待つ。丸い月面の陰影が向かいあつた兎の餅をつく姿にみえてくる。保育者の真に迫つた餅つきの話に幼な子の夢がひろがり、ペッタン、ペッタンと杵の音がきこえ、つきたての餅の味が口に広がり、唾をのみこむ。そうした時に清らかな、あわいしかし幸なときをもたらし、彼等の自力の足しになるのではないか。科学の発達により月面に宇宙飛行士が着陸した現在、多くのクレーターがあり、うさぎにみえたりする「静かの海」「豊かの海」等がある事が明らかでありそういふ絵本をみながら話しあう事も大切であるが、なお、おはなしの世界を楽しませる事の出来る保育者であってほしい。

一九七三年四月十八日、私は中国北京南西部、周口店到北京原人(シナントロプス)発掘の地を訪れた。郭沫若先生の「山頂洞」と書かれた洞に腰をおろして、少しでも四、五十年前既に火を使っていたといわれる人類の息吹にふれたいと思って覗きこん

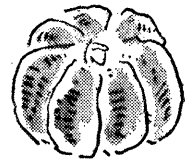
だ私は、石灰だらけになった。やがて埃をはらいつつ立ち上り、洞のある小高い山の上から澄んだ空を仰ぎ、又民家、工場の点状する広々とした大陸をながめた。あれ程嘆いた夫の早逝もこの時点ではものかずではなかった。五十年後に地球があるかしら、とも思つた。

物質文明を追うあまり資源の濫費、伴う自然の汚染。三十年、五十年先すら案じられる。子孫に遺す地球を大切に思うと共に困難な時代に対処出来る人材を育てたい。処理に困るような廃棄物を出さないエネルギー源の開発を望むと共に、人類の平和を築く英知がなくてはならぬ。その人間を育てる事の重要さを日々の保育に思う。いたずらに早教育を追うのではなく、四歳児には四歳児の生活を、喜びを、健やかさを、ゆたかさを存分に味わわせた。自分で観て、自分で聴いて、自分で考える。幼児に人間のふるさとのところを身体一杯に感じさせる行事を——と思う。

母の少しでもやすらかなときの長からんことをねがいつつ筆をおく。
(青い鳥保育園)

お誕生会

周郷先生の講演をきいて



蕪 木 寿 江

どこかでお花が咲きだすように

なんだかうれしい誕生日

どこかでお花がまわってるように

なんだかうれしい誕生日

周郷先生の詩に、溝上先生の作曲のメロディーが小さくなりだします。すでに母の会で指導ずみの曲なので、招かれたその月のお母様の中には口ずさんでいらっしやる方もあります。繰り返しレコードをかけているうちに、椅子に腰かけてお誕生会を待っている年長組の子どもたちが、

「なんだかうれしいたんじょうび」の終りのところだけを少しずつ歌ってきます。

なにかが、ここで、あそこで、動きだし、まわりだしたように、だんだんとお母様方と、子どもたちの声が唱和していきます。

ここでお誕生会が始まります。園長からカードが渡され、お祝

いの言葉があり、その月のお花のかんむりをつけたお誕生月の子どもが、自分の名前をマイクで言ってから、クラスの先生からの紹介があります。

——「智彦ちゃんは、大きくなったら、市が尾幼稚園の先生になって、小さなお友達といっぱい遊ぶんですって、やさしい元気な先生になるでしょうね。先生方も待っていますね」

——「勇ちゃんは、虫取りの名人です。一緒に探しても、先生には見えない虫が、勇ちゃんにはよく見えるのね。虫が好きだと、虫の方から勇ちゃんのところへ寄ってくるのかしら」

——「みさきちゃんは、絵を描くのが大好きなの、この間の幻燈のあと『おむすびころりん』の絵を三枚つづきで描いたのよ。紙芝居みたいでしょう」と言っていて見えます。

不思議な六歳にめぐり会った喜びを噛みしめて、具体的に、その子の言葉や、行動を話します。写真の貼ってあるカードにも、

成長を喜び祈る気持で、一人、一人にそれぞれの感慨を書きま
す。

——お花が咲く四月、つばめが飛んでくる四月、純ちゃんの涙が
飛んでいく四月、お誕生日おめでとう。

——六歳って不思議なとし、ぶらんこがすいすいこげるようにな
ったとし、お友だちが「かずちゃん、あそぼう」って、呼ん
でいるとし、六歳おめでとう。

——明子ちゃんのやさしい心は、どなたからいただいたの。おじ
いちゃんからかしらおばあちゃんからかしら、それともパ
パ、ママからかしら、それともたなばたのお星さまからかし
ら——。

——兎さんとお話が出来るさっちゃん、兎さんが何が好きか、ち
ゃんと知っているさっちゃん、兎さんの声が聞こえるみた
い。

——新ちゃんの歌声にお庭の木の葉が踊ります。赤とんぼが、お
窓でそっときています。もうこわいお怪我はしないでね。

——てっちゃんは、みんなをゆかいな国へ連れていってくれる機
関車の運転手です。

象徴的でなく、その子どもでなければ持っていないよさを、で
きれば季節の感覚と合わせて書きます。元気がない子には、励ま

す言葉を探し、落ちつかない子には自信をつけさせ、乱暴な子に
はやさしい面を強調し、この六歳の誕生日に何かのチャンスをつ
かむことができたらと願います。

長い将来の間に、心が荒れた時、解決できない壁にぶつかった
時など、このカードを眺め無限の可能性を秘めていたこの時代を
ふりかえって、また、新たなフアイトを燃やしてほしいと念じ、
僅かに数行を書くのにも熱がこもり、目頭を拭くことが常です。

言葉は上手でなくても、そこにその子がいて息づいている脈搏が
聞こえてくれればいいのです。先生の気負いの言葉は禁物です。そ
れはベトベトするお世辞のように偽物になるおそれがあります。

先生は誰もその子を正しく観察する眼を持っています。上から見
下ろすのではなくて、子どもの眼の高さになって子どもと話した
とき、子どもの生活が自然に見えてくるものです。カードを渡し
たあとは、その月生れの子どもたちが劇をします。幼稚園はとも
すると、クラス単位になる傾向があるので、この機会に同じ月の
仲間で行います。

一学期は、三か月間、「なかよし蝶」をします。

『赤・白・黄色の蝶々が飛んでいます。雨が降ってきたので、雨
宿りをさせてくださいと、赤いチューリップにたのみます。同じ
色の赤い蝶だけならとめてあげましょう、と言うのです。する

と、赤い蝶が言います。わたしだけ休ませてもらってもお友達が濡れてしまつては可哀想ですから、ほかを探しましょう、と言つて雨の中をお花を求めて飛んでいきます。今度は、白いゆりが咲いています。白い蝶とゆりが同じことを繰り返します。次に菜の花が咲いています。黄色の蝶と菜の花が同じ言葉を繰り返します。そして最後には、

「とうとうどこにも一緒にとめてもらえるところはないのですねえ」と言つて、雨に濡れた羽根をお互いにいたわるように伏せていきます。そこでお日様がでてきます。

「友だち思いでなんと感心な蝶々だろう。よし、照らして暖かくしてあげよう」と言つて蝶々のまわりを回ります。羽根が少しずつ乾いてきて、風にのつておどれるようになります。」

このお話の作者は知らないのですが絵本より劇になおしています。

四月は劇あそびまでに発展しなくても、こちらが意図して与えたものでも、それが子どもの生活の中に浸透して遊んでいるうちに、自然に言葉になつて生活になつてくるような気がするのです。年代こそ違え、女学生の頃、啄木の歌を覚え光太郎の詩を口ずさみ、ヘッセの詩を暗記し芭蕉の句に傾倒し、それがいろいろな形で、今でも生活の中にてくるものです。詩は覚えるものと誰

も教えてくれなくても、それがテストとの関係もなく、生活の一部だったのでしょうか。

そんな意味も含めて、この大切な時期に、共に生きるよろこびを、美しい言葉との出会いによって全うしたいのです。

「なかよし蝶」を五月、六月と繰り返すうちに、いつの間にかせりふが言葉になり、更に子ども自身の言葉もつけ加えられて、部屋の間で、園庭で、木影で、なかよし蝶が誕生してきます。お日様になりたい男の子が沢山いて、いくつものお日様が顔をだしてきます。部屋の関係で別々に行なう年少組のお誕生会にも、その劇を年長組がやつてみせてあげます。お日様がでてくると、見ている子どもたちの表情も明るくなり、思わず拍手がおこります。

二学期の前半は子どもが興味を示したことを一緒に劇や紙芝居にし、後半には、「笠地藏」をします。雪の中に立っているお地藏さまに、売り物の笠を全部かぶせ、自分の笠まであげてしまったやさしいおじいさん——。

「それはよいことをなさいましたね。なにはなくても丈夫でお正月が迎えられますもの」と、迎えたおばあさん——、このやさしさは、子どもたち自身が生れながらに持っている心なのでしよう。自然に会話が流れてきます。

クリスマス会の時も、今度は十二月生れの子どもたちが、全員のお母様方に同じ劇をお見せします。懐かしい童話の世界といろりの火の匂ってくるような言葉が、狭い会場いっぱいに繰りひろげられ、子どもたちの可愛さと相俟ってほのぼのとした雰囲気包まれ、いつの間にか観客席の皆がこの主人公になっているような気がします。少なくともこの劇を見ていた瞬間は、ほおかぶりをして雪の中を歩いたおじいさんに、そして喜んで迎えたおばあさんになっています。このままの気持ちで新しい年を迎えてほしいと念じながら幕がおります。

三学期は、ごっこ遊びの中からの劇や、又は日常の生活の中から生まれたものを、子どもたち自身が絵ばなし（模造紙二枚綴りのを十枚前後）にしてやります。たとえば、劇では、三か月間「みにくいあひるの子」をしたこともありすし、絵ばなしでは、雪が降った日、セキセイインコのお父さんが死んで、その死体のまわりに、母親と子どもたち五羽が身体を寄せて首をすくめて動かないで悲しんでいたことがありました。それを子どもたちが発見し、次の世界を創造して描いたことがあります。

また、先生方がつくった指人形や、ペープサートもします。練習不足だと本当のものはだせません。準備も完全にしないと、つまらないものになってしまいます。なにによらず、繰り返し努力

することが自信につながるものなのでしょう。

何年前の『幼児の教育』に、周郷先生と思田孫一先生との対談が載っていました。串田先生がその中で、

「幼稚園時代で一番印象に残っているのは、女の子がつくってくれたさつま芋の茶きんしぼりだ」と言われていました。そしてそれを素敵なことだとおっしゃった

周郷先生に、更に感銘を覚えました。口先だけの学者の念仏ではなく、身をもって自然を愛する先生方のお話に共鳴し、それ以来、茶きんしぼりの話が頭のどこかにこびりついていて離れません。しかし、人数とか、設備とかで、なかなか実行に移せないでもたもたしています。

自然とのかかわりの中で生まれた行事を、どうしたら人工着色しないで、その素朴なもち味がだせるかと思えます。ただ子どもが喜べばいいという一方的なご機嫌とりの行事は、ガラガラした色彩の玩具や、人工甘味料の食べ物で飾るのと同じことでしょ。それにはどうしたらいいのでしょうか。

まず大人自身が木の香りがわかり、自然の色が見え、小鳥のさえずりが聞こえ、子どもの感覚になることが大切なことなのでしょう。

(市ヶ尾幼稚園)

倉橋賞を受賞して

利島保

今回の受賞対象となった研究の構想は、ずい分前になる。一九六六年の *Psychological Review* でピアジェとサットン・スミスの遊びの理論に関する論争論文を読んだ時になる。その時、ピアジェの理論は、遊びについて十分な論証を上げず説明原理にすぎない仮説を述べているのではないかと思った。ピアジェの理論は彼のすばらしい洞察の中で生まれてきたものであるから、私のようなものに批判できるわけのものではない。ただ、彼の遊びについての書物を読むたびに、彼の説明は納得できるようにしても、もっと実証的に彼の理論が証明されないかと思いはじめていた。

特に、従来、遊びというものが、魔的な力をもち、それを分析的に見ることが、何かおかしさからざる神域へはいりこむような風潮もあったが、心理学は、無遠慮にもそんな神域へつかづか入り込んでいったのである。ピアジェもその一人である。彼は幼児の遊びを認知発達という側面から取り組んで、遊びのメカニズムの解明を行なったのである。

ピアジェの遊びの認知機能への働きかけについての仮説は、今回の私の研究の中心になっているのは、単にピアジェの理論の検証という意味以外に、幼児の遊びをもっと冷やかにみることによって、遊びの心理学的研究の意義を考えなかったからである。

昨年九月、ニューオーリンズに開かれたアメリカ心理学会で、幼児の遊びについてのシンポジウムが、サットン・スミスとオーガナイザーとして開かれていた。私はそのシンポジウムに出席したが、そこでは遊びの機能の分析に関して、幼児の認知発達とのかわりについての論議がかわされたことが、興味を引いたのである。オーガナイザーのサットン・スミスとは、彼のピアジェとの論争論文を読んで以来の手紙の上での交流があり、昨年夏に私が渡米したおり、コロンビア大学の彼の研究室で数時間、話す機会を作ってくれた。

彼の話によると、アメリカ心理学会が遊びについてのシンポジウムを持ったのは、初めてのことで、今までは、遊びを心理療法

の手段としての意味でしか心理学者の研究対象にならなかったのであるが、彼の今回のシンポジウムは、遊びを心理学の研究対象としてもつと意味のあるものとして広く学会にうたえたいという意図を含んでいるのだと、語ってくれた。

私も彼の話に共感をおぼえた。遊びについての解釈学的、了解学的研究は、今までにも枚挙にいとまがないが、遊びが幼児の精神発達にいかなる意味をもつかを実証的に示してくれた研究がどれほどあったかは、浅学の私にはわからない。ただ、私の目にした客観的研究といわれるものの多くは、観察法を基礎にした生態学的研究であった。確かに、そのような研究は現象記述の上では客観的資料を提供してくれはする。しかし、そこに設定された条件とのかかわりで現われた行動(遊び)についての因果関係は、了解的解釈に満足せざるを得ないのではなからうか。客観的研究はこのような生態学的研究を基礎に、新たに条件コントロールした実験的研究を行って、因果関係をあきらかにする必要があると思う。

今回の受賞研究も、その意味では十分な客観的研究とはいえない。しかし、単なる生態学的研究よりも、仮説に基づいて遊び行動のメカニズムにアプローチしたつもりである。

多分、多くの人は幼児に実験統制をすることに對し、かなり抵

抗感を持たれると思う。実験条件の効果の差から出てくる、幼児への影響をおそれる方が多いのではなからうか。それとも、幼児を実験に供することが非人道的と考えられているのだろうか。私にはもはやそんな人は保育にたずさわる方の中にはいらっしやらないと思うが、そういう幼児に対する配慮が、生態学的研究だけにとどめられていることは、逆に、幼児の将来を暗くするのではなからうか。

特に、遊びという幼児の生活そのものであるものを、実験的に研究することのむつかしさを感じるので余計に、遊びのメカニズムを冷やかに見てやろうと力むのである。

学会を終えてニューオーリンズの空港で、サットンミスと別れる時、彼が私に言ったことは、「おい、保、遊びは心理的行動だから心理学が研究する意味があるのだ。特に、子どもの遊びを我々大人が、子どもらしいと感じるのはどんな点かと、心理学的論理で説明することは大切なことだ」ということだった。

私は、彼のこのような意味のことを頭におきながら、帰国後にこの研究に着手したのだが、今から考えると、意気こみだけの龍頭蛇尾の研究になっていると、ひやっとするのである。

(広島大学)

。次号より受賞論文を連載します。

橋詰良一 著

「家なき幼稚園の主張と実際」より (十二)

第十九 自動車から電車へ

こうして、自動車で運ばれる子どもの行く先は最初は中之島や天王寺の公園、次には淀川や新淀川の遊園地帯、または長柄橋の方面にある柴島一帯の水源地地方、それを丹念に回っていたものですが、どうも野原らしい心持にはなりにくい。

ついに第四師団の当局に頼んで高い城内の芝原を遊戯場にかしてもらふこととなり、二台の自動車は大きな顔をしていかめしい城門を通過出来るようになりました。

けれどもこれとて窺策たるにすぎないので、高い城壁の上から深い堀の水を見下ろす時などそぞろに恐ろしい心持を呼びおこしておりました。

考えても考えても大阪という大きな都会をはなれて清らかな野

原へ出て行こうとするにはどうしても電車によっていくらかの遠い距離を走らなければならない。

それにはまた前のような考えにもどって「幼児電車」による他はないと考えはじめたのでありました。

丁度その頃割合に乗客の少ない現状にあった大阪鉄道に着目して同情ある回答を得るよう交渉しかけている時でした。大阪市立市民館の組合幼稚園が早くも新京阪電車と契約して、「電車幼稚園」が出現したという新聞記事が見えたので、私の方の交渉も速かにはかどるようとなりました。

それは二台の自動車で集めた幼児を同じようなダイヤグラムによって大鉄の阿部野停車場へ運んで行ってそこから電車に連絡して適当な緑の野へ運び出そうとするのです。即ち自動車と電車の連絡案なのでありますが当時の保育場所として会社の指定してく

れたのは今の矢田の野でありまして、そこに幼児集合所をつくりあげたのは大正十五年の春でした。

自動車から電車への進展を第二期として私の大阪家なき幼稚園は新たな地歩を大阪の幼児界に占め得る機運が招来されたような喜悅にふるえながら十人の若い娘たちと四人の兄ちゃんとが日も時も忘れて勇躍を続けております。

第二十 小学校との連絡

娘と幼児との自然結合と自然愛の発生とに任せて児童愛の道場を広めて行こうとするような万事が自然的な方法をとっているために、どうもすれば第三者から放縦なものに見られたり、また無計画な粗暴なものだと考えられ易い私の園の子どもたちが、はたして園を出てから後の小学校教育界からどんなに見てもらわれるであろうか、あるいは思いがけもない悪評をその子どもの上にもたらずようなことはなかるうか、こんな苦心は普通の幼稚園などを経営する人の夢にも思い及ばぬ程にまで私を強く反省させておりました。

私の主義や方針に対しての誤解は少しも意とするところでないが、子ども自身の上に誤解が落ちて来るようではその子に対して、またその子の親に対しても気の毒だと思えますために、特に

研究的の態度をもっておられる筈の小学校、池田師範学校の附属小学校などへは絶えず先生を参観に行ってもらって、うちの子どもに誤りはないか、うちの子どもにも悪いことはないか、そうして私達のしたことから善からぬ結果が人の子の上に染めつけられてはいないかというようなことを考慮し、質疑し、反省するようにと努めては来ましたが、幸い今日迄にはあまり大きな欠陥として指摘されるような問題に出会いませんでした。

ほんとにこんな考慮は、新しい道を行こうとするもののためばかりでなく普通人の子どもを普通人の世界に住む同人として見る上からも、決して無用ではないと確信しているものであります。ある先生の日記の一節を録しておきましょう。

◇初めて附属訪問

治子（池田）

午後三時、附属を訪れる。先生方は教員室におられる様子。廊下でバッテリー横尾主事に会い詳しく訪問の由をつげ応接室に案内された。

一年受持の泉田先生が出て来られる。子どもたちから先生の御名をよくよく聞かされていたので何だかうれしかった。運動服を召した先生は、これからバレーボールをなさるところだったようですが特に時間を割いて、私共のために、いかにも御親切に、し

かも心地よく話してくださいました。私はまた毎年順々にやんちゃな子どもたちがお世話になっている御礼をこもごものべた。そして教えていただきましたあらまは、

問 一年の我が園からの児童の成績は？

答 殊に、家なき幼稚園という風に統計を取ってみないが、まあ中以上の成績で、至って出来ない子も無ければ今では飛び抜けている子も無い。もちろんまだわからない。物事にはきはきしたところは最もよい。

問 先生の手を殊にわずらわす子は？

答 男の子は全体やんちゃで、どこの子どもも同じです。殊に私の意見は子どもらしいやんちゃはさせてやる。今年の一君は最初随分私を困らせた普通の子とそのごんたが違ふ。今ではまったくよくなつて来たので喜んでゐる次第です。雲雀ヶ丘のK君も同じ神経質でやりにくい。

問 上級生で園から行った子の成績は？

答 よい方でしょう。幼稚園に行つてゐた子どもは学期の初めに気がきく。人なれていて、答えもしてくれる。が一方一分も静かに出来ない。与えられた机の中へ頭をつっ込んだり隣りの友達と話したり、けれど、学期末にはやんちゃはだん

だん落ちついて、おとなしい子は随分やんちゃに同じ様になつてしまふ。

問 知つてゐるふりばかりしません？

答 たいしてそう感じた事はありません。

問 家なき幼稚園に対する先生方の批評は……

答 みんな先生の趣意を賞してられる事を聞いた。泉田先生は殊に御自分の意見をのべてくださった。

○物を教えない

○先生もお姉様になつて遊ぶ

○体の方を重んじる

○室内よりも野外

○なるだけ叱らない

○母様との密接な関係

その上子どもの叱り方、内気な子を活発にする方法など先生の御意見を聞き、また足りない私共の経験話を話して有益にこの日を過ぎた事を喜び帰途についた。

以上はほんの最初の訪問の一節を参考に書いたまでですが、その後も出来るだけの注意をこの方に向けてもつています。特に我が園との連絡を潜在意識としてゐる箕面学園小学校のようなものについては改めて申しません。

第二十一 母のお当番と母の教育

前にも度々申しました通り私の幼稚園は、娘と母との協力に成る子どもの国でなければならぬので、娘と幼児との相触れる心の光達距離内へ、「その子の親」としてばかりでなく、一般の幼児の親としての母親を近づけて、識らず知らずのうちに一般兒童愛の理解を深くしつつ自己の心性浄化にも与らせたいと願う趣旨から「母のお当番」という制度を設けました。これは「保母の週番主任制」とともに私の園の最も大切な行事であります。

お当番の誓約 入園の最初に左のような刷物を渡して必ず誓約させることにしています。

池田で使用しているものを参考にお見せいたします。

保育当番のさだめ

真に婦人たちの協力で幼稚園が出来ることは私達最初の試みだと確信いたします。

どうか当番保育にはなるべく御加入を願います。

一、保育当番の順序は別に定めてお知らせ致します。

一、当番の徽章を前日にお返し致しますから、当日はそれをつけて幼児と同じように弁当、水筒を持って御越しください

い。そして一日子どもの連れになってやってください。

一、お差支えがありましたら順番の次の方へ前日に徽章を送ってください。

一、当番が済んだら徽章を幼児園に置いて行ってください。幼稚園から次へ送ります。

一、新加入者は順番を定めて追々御報告いたします。

一、徽章は大切に失わぬように願います。

一、当分は一日一人に致しますが、人数が増したら二人にも致します。

大正十二年六月定

池田家なき幼稚園

このようにして置いてから、いよいよになると母親の全部を住宅順にして表を作って各家庭へ配ります。そして、順次にお当番の徽章を送らせるのです。

お当番の徽章 これを胸につけると「お当番」だということで遠慮なく来園されるという強みも出来ますし、また義務を明らかに示されることとなりますので、大概の母親は出て来られます。

（ほんとにせいたくを嫌う幼稚園ですがこの徽章だけは銀地に保育者当番と七宝にした美しいものにしてあります）

この徽章を一番最初は幼稚園から送りますが、それから後はそれをつけて当番をした母親が、表の次の母へ持って行くのです。ある意味からは、これだけでも子どもを通じての美しい社交になるといっていますが、意外によい結果を得た実例があります。

お当番の日記 「お当番の日記」という帳面を作っております。書ける母たちには何なりと書いてもらうことにしましたが、これは書くことを嫌がる人たちを困らせたようでしたから、大抵は御話などを聞いて、主として週番の主任保母に記入してもらうようにしました。

母たちの日記から

母たち、姉たちの日記の中には、実に驚くべき真剣さが見えます。

最初のうちは当番を面倒がる人が割合に多くて、時には不可能の試みかも知れないと歎じさせられました。少し馴れて来ると誰でもドシドシ園に来る、後には待ちかねるようになって大喜びです。

。

加賀とく子

お当番としてあがるのは初めての私、何となく心がそわそわ、仕度もそこそこサア母アさま早う一緒に行く行こうと子どもニコニコ顔、毎度代りを女中にもらうのを子どもどころにも

気兼ねすると見えて大喜びです。この様を見ると次からは是非とも自分が参りましようと思いました。子どもの国、無邪気で活発なみなさん両のほおをリンゴのようにして寒さもとわずストーブそっちのけでかけまわる元気よき。とみ子も年中医者の手から離れたことのない弱虫でしたが園児のお仲間入りをしてからすっかり病魔からのがれることが出来ました。これもひとえに先生たちとお友だちのおかげと御礼申します。朝のうちはお遊戯、午後に来たる皇孫殿下のお誕生を祝うための旗をつくる。ほんとうにこの旗こそは純真な心の持主が捧げまつるお国の旗、春になってこれを振って喜ぶ姿が思われます。こうしてお当番に上りますといつまでもいつまでも一緒にいたい心持ちがいたします。帰るのも心残りがいたしました。

。 島 千鶴子(池田)

いつ見ても変わらないのは子どもたちの純な心です。ずいぶんいたずらをして先生たちやおぼちゃんを困らせますけど、それらをみんな子どもたちの純真が補ってくれます。ここは大人の世界に見る事の出来ないきれいな世界であることを感じました。ねがわくは純な子どもたちの心をそのままに、大人の小細工を施すことなしに、素直に成長させたいと祈らずにはいられません。今日一日浄化された心で一緒に楽しく遊びましたことをうれしく思い

ます。またアレキサンダー先生が御親切に英語をお教えくださいますので子どもが熱心にくりかえしているのを見せて頂きましてうれしゅうございました。

田中康子(同)

無邪気な子どもの遊びを見ていると若かえったような気がいたします。家庭にはイツも邪魔あつかいにいたしますが、こうしてお当番に来て見ると心置きなく子どもと遊べるのが結構なことだと思います。(省略)

或る母(同)

六月のある日、お庭には初夏の陽光がいっぱいです。おひるをすませてから子どもたちと出てみますと、お庭の紫陽花がお首をたれてぐったりしています。折から入って来なすったYさんに「どうしてでしょう」とおたずねすると「さあまさか水がたらないなんて事はないでしょうがね。あんまりお日さんの愛撫がつよすぎたのかな」とおしやれをいわれました。笑いながらどうにかならないものかと花房をいじっていますとさつきからじっと見入っていた千鶴ちゃん(五歳)が「それさわったらいかん」といいます。「どうして」と聞きますと「お花ねんねしてんね」ですって。愚かな二人の大人は呆然と顔を見合わせました。(省略)

母の為の講習会 私の子どもの園のすべては、母のための教育であると考えていますが、直接的なものとしては、いろいろの講習を催します。

一、子どもの遊びまわる範囲に生えている雑草の現地講習(これは春、秋に分けて行います)

一、子どものための食用を主とした、お菓子や、パンや、お料理の講習

一、子どもと一緒に生活することの出来るよう童謡、舞踊、遊戯などの講習(これは幼稚園の先生に教えてもらう方法で)

一、園医たちの子ども衛生講習

一、童謡三絃の講習

一、子ども芸術の講習

一、子ども生活を凝視する方法の講習

数えて行けば限りもありませんが唱歌、遊戯などを子どもと一緒にするのは、非常に愉快なようです。

◇母ちゃんのお遊戯

操子(真面)

近頃大抵のお当番のお母様がお遊戯の中へはいってくださるようになってきました。今日は思いがけない岩崎様も子どもと一緒にお

遊戯してくださいましたので、ほんとうにうれしゅうございました。

今年入園児のお母様たちは、みんな子どもや、幼稚園には理解のある方たちばかりでございます。

いらっしやる方もいらっしやる方も、近頃のお家庭の明るさを話してくださいます。

河原様は『晩さんの時は必ず家内総がかりでお遊戯いたしました。妙子が先生で、私や父が教えられます。私は毎日幼稚園へよせていただきますから、下手ながらでもするのですけれど、父が変な格好をするものですから「お父ちゃんは下手やよって、あかん」って妙子がおこるのでございますよ』って話しておられました。

友辺様も「お夕飯の後は必ずお遊戯にきめてありますの、この頃はお父さんまでひっぱり出されますの」ってお話です。忠夫ちゃんの先生、どんなに可愛いでしょう。そして奥様はお当番でない時でも、いらしたらお遊戯してくださいます。盆踊りなんかとてもお上手です。

平野様は『先生近頃沢子が急に元気になったでしょう。家へ帰りましても「お母ちゃんスキップしましょうお父ちゃんスキップしましょう」ってこの頃家の中は大騒動ですの』ってお母様はん

とにおうれしそうです。

清野様も『近頃は幼稚園でお母様方が子どもさんと、お遊戯なすっているって女中が申しますので、私も負けないように毎日おけいこしてましたの。もうこの頃は家内中が幼稚園室で、女中は赤ちゃん片手に盆踊り、お漬物を切るのもお唱歌と、そのにぎやかさは』ってことです。

昨日入園していらした杉田さんの奥さんも『私もお遊戯させて頂きます。それに生まれて、まだ持ったことのないお弁当ももたせて頂きます』とのお話でございました。あまりお若くもない奥様がほんとうによろしゅうございました。

こんなによろしいお便りをあちら、こちらから聞かせて頂いて、私たちは毎日喜びに胸おどらせております。

和氣あいあいとしたお家庭の御様子が目に浮ぶようです。子どもを通じてお家庭に接近することはどんなによろしいことでしょう。

(つづく)

* * *

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (二)

名古屋市立大高幼稚園

かみなりの空

きょう絵をかいているとき、空がどんよりとくもってきたことに、教師自身気がつかなかった。隣にいたあさ子が何か話しかけてくるので、なんだろうと思って聞いてみたら、

「あつかみなりの空だ」

という。最初は何のことをいっているのかわからなかったが、空をみると曇ってきているので

「ほんとうだ、かみなりが鳴って雨が降り

そうだね」

と答えると、

「うん、そうだよ雨が降りそうだね」

とうなずいた。

◇ ◇ ◇

「雨が降りそうな空」と「かみなりの空」という二つの表現はくらべるとおとなと子どもの感覚のずれのようなものがあると思

う。子どもの感じ方にはとらわれがなく楽しさを感じる。特にあさ子の表現にはよりそのことを強く感じさせられ、感受性の豊かな子どもであると思った。絵をかいているときでも、

「でっかいあかーいおぼけをかいてやろう」

といって画面いっぱい真赤にぬりつぶしたりする。(四歳児 五月二十二日)

ぼくのかたつむり

登園すると、製作コーナーにすわりこんで、もくもくと製作をはじめたみおが、きょうは

「先生、あれどうしたの？」

と壁画をさしている。

「先生が作ったの」

「かたつむりも先生が作ったの？」

「そうよ」

しばらくすると、何やら作りはじめた。教

師のかたつむりをまねて紙を切り、マジックインキで、目とからをかき、「先生かたつむりができたよ」と見せにきた。

「あらほんとうだ。たみおちゃんのかたつむりね。かわいいのができたのね。うしろに先生のかたつむりといっしょに、はわせておこうかな」

壁面にはり終ると満足した表情をみせ、つづいて違うものを作りはじめた。

◇ ◇ ◇

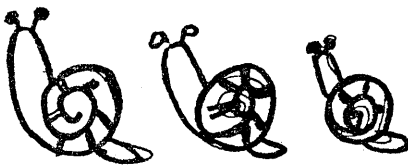
環境設定として教師の作ったものに刺激をうけ、教師と同じものを製作してみたいという気持ちでいっしょうけんめいに作ったものである。しかしかたつむりの表情は教師のまねではなく、全くその子らしさが出ていてほほえましい。子どもの活動をみていると教師のしていること、友だちのしていることに非常に関心をもって、自分もしてみたい、作ってみたいと思っていると

いうことをいろいろな場で感じるのである。例えば、なわとびを園庭のすみでひとりでとんでいた、サッカーごっこにはいれるようにとボールけりをいっしょうけんめいしている姿を見る。それでこそ子どもは成長するといえる。まねがまねに終ることなく、その子らしさを認めることにより、その子の創造性が育ち、努力する心情も生まれるのだと思う。

また人的環境として子どもにさまざまな影響を与え、教師自身のあり方の重要さを改めてかみしめることができた。(四歳児 六月四日)

ぼく 友だちと遊んだよ

父の日のプレゼント



の製作を終えたふみおが、ぼんやりと積み木遊びをみている。ひとり遊びの多いふみおが積み木遊びの子どもたちと、かかわりをもってくれないかと思ったので、「ふみおちゃん、先生といっしょに入れてもらおうか」

と誘ってみた。うまく教師の誘いのにってきて積み木遊びの中に入ることができた。しばらくして、教師はその場をぬけたが、ふみおはそのまま残って遊んでいた。しかし、表情をみると、あまりおもしろくないように思われた。無理にひっぱりすぎた感じがしたが、そのままようすをみることにした。表情はあまりかわらなかったが、みんながやることは、同じようにしようとする姿はみられた。友だちとのかかわりもてなかったようで、昼食は、積み木遊びの友だちとは全く違った席で食べていた。午後どのようなきかけがあったのか、じゅん・つねお・ゆきひろたちと、追いかけて

こをしていた。大きな声をあげ、汗をいっぱい出し、真っ赤な顔をして遊んでいた。

◇ ◇ ◇

ふみおは、入園当初からひとり遊びが多く、友だちとかかわりをもてるようになるチャンスがなかった。教師がいろいろ働きかけてもうまくいかない場合が多い。しかし、きょうの場合、いくぶん強引なさそいかけであったと、反省する面もあったが、午後の遊びのきっかけになったのではないかとも思う。遊べない子どもへの、接し方のむつかしさを感ずると共に、教師の積極的なかわりもまた人・時・所を考えていかなければならないと思った。

(四歳児 六月十二日)

ほんとうだ すごい！

雨降りのため、園庭に出られない子どもたちは、ごさを出し二・三人で絵本をひろげてみている。その中のひとりが教師に

「これよんで」

といって、「のろまなローラー」の絵本をもってきたのでよんでやる。

そのあと、ただおはひとりでその本をかかえこみ、

「ほんとうだ、すごい」

と声を出しながら一枚一枚いっしょうけんめいにみている。

◇ ◇ ◇

教師といっしょにみている時に感じた部分をたしかめているようだった。ひとりでじっくりとみているこんな姿を大切にしたいと思う。(四歳児 六月十八日)

ほくの水族館

たかやは積み木でかこんだ中にパズルのかめを入れて遊んでいた。

「あらここにかめが泳いでいるわ」

「そうだよ、ここは水族館だもん」

と当然だという顔で返事をした。

「そう、先生もやっぱり水族館じゃないかなと思つたわ」

◇ ◇ ◇

おとなは水族館であれば、いろいろな魚がいるところという状況を思いうかべてしまふ。そのような表現をしていないと水族館というイメージは出てこない。しかし、子どもは水族館の中で、最も興味をもったもの、そのみを表現し、それでじゅうぶん水族館として満足する。
「水族館だもん」ということばは子どもの思考がよくあらわれていると思った。

(四歳児 六月十九日)

おはながさいた

より子が、紙を小さくふくらませ、下の方をセロテープでとめたもの(次頁の絵)をもってきて、うれしそうな顔をする。

「何かおもしろいものができたね」

といいながら、何だらうと考えたがわから

ない。

「お花のつぼみみたい。きつときれいな花が咲くんだね」

と話しかけてみた。より子は、それを教師に手渡しして、「そうだ」とも「ちがう」ともいわないで、どこかへ行

ってしまった。しばらくしてから形は同じで、前より大きいものをもって

きた。

「あら、つぼみが大きくなったね。もうすぐお花がさくかな？」

と、そのままつぼみということで話をした。すると、それも教師に渡し、また製作コーナーへ行く。今度は円すい形をおしつぶしたような形のものをもってきた。教師は前の作の作品のことを忘れて、

「指にはめるのかな？」

ときくと、首を横に振る。それをみて、全然見当違いのことをいってしまったことに



気づいたので

「ああそうだ、花が咲いたんだね。きれいな花になったね」

というところ、うんとうなずいてくれた。

◇ ◇ ◇

結果的には、つぼみがふくらんで、花が咲くまでの、過程を表現したということである。最初より子が、教師にみせてくれたときのものが、何であったかはわからぬ。教師とかわりながら、より子らしい表現で、イメージをふくらませていったことにおどろくとともに、無口で消極的なより子が、せいっぱい、教師にかかわろうとしている姿ではないだろうかと思われる。

(四歳児 七月十八日)

おかあさんがいなくなっちゃった

ままごとで遊んでいたさき子が、

「赤ちゃんが病気のな」

といった。

「まあ、困ったわね、じゃ一度わたしがみてあげましょう」

と赤ちゃんののどをみるふりをする。

「これはへんとうせんですね。薬をのませて、暖かくしてあげてください。わたしが薬を作ってあげましょうね」

えみ子もってきてくれたかれた花で薬を作る。

「まだこの子予防注射がしてないの。金曜日に予防注射があるんだけれど」

「じゃ、注射につれていってあげて」

「だっておかあさん出ていっちゃっていいんだもん。お金をもっていかなきゃいけないしお金はだまって持ち出しはいかんもん」

と困った顔でいう。

「では、おかあさんよんでくるわね」

と聞いて製作コーナーにいたきよ子に、

「おかあさん、赤ちゃんが病気ですって。早く帰ってきてください」というと、

「だって、わたしもうやめたのよ」

といって、全然関係ないといったようすで何かを作っていた。

◇ ◇ ◇

結局おかあさんはどうなったかわからないが、ままごとはずっとつづいていた。お
かあさんを待っている子どもとおかあさん
のきよ子との、この空間をどううめたらよ
いか。あとで考えると「ああすれば」とか
「こんなことばをかければよかった」とい
ろいろうかんでくるのだが、瞬間的にはど
うしようもないことが多い。子どもの遊び
は常に流れているしもどらないと思う。そ
の場の子どもの感情に、敏感に反応してい
くことの大切さを痛感させられる。

(四歳児 十月十七日)

フフフフーなーんだ

最近、たつおとすみおが、いっしょによ
く絵本をみている。ほんとうに楽しんでみ

ているのだろうか。どんなみかたをしてい

るのだろうか興味をもっていた。きょう
も一日中といっけいいくらい本棚の前でみ
ているので、教師もすわりこんでいっしょ

に見ることにした。ふたりは同じ本を何度
も何度もみながら、

「びっくりしてるよ」
とふたり顔を見合わせて、

「フフフ……」
と笑ったり、

「なーんだ」

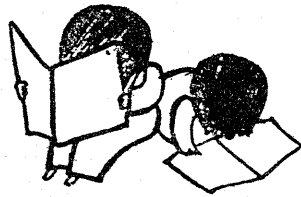
などと絵の表情や内容を読みとり楽しんで
いる。きつとふたりに通じ合うものがある
のだろう。

◇ ◇ ◇

子どもの遊びとかひとりひとりの子ども
のことについては、外側からみているだけ
ではわからないことが多い。教師も子ども
の友だちとしてはいっていくことによっ
て、子どもの内面が外からただ見ているよ

りはわかっていくようになる。

(四歳児 十月二十三日)



ハンカチ・ポーン

ひとしが、園庭で自分のハンカチを上
放りなげると、落ちてくるのをつかむとい
うことを、何度もくりかえしてひとり遊
んでいた。軽い中にもハンカチの重味があ
り、片手でつかめる大きさであり、横でみ

ていて楽しそうに思えた。ひとしが、放りあげた時、ひとしより高い位置で、ハンカチをとり放りあげた。ひとしも、必死につきかもうとする。教師は、とられまいとする。このようにしてしばらく遊んだ。こんな簡単なことでもやってみると面白いんだなあと感じた。そのあと、細長い紙に、「ひとし」と書いては、何枚ももってきてくれた。

「先生にお手紙くれるの？ うれしいわ」というと、にこにこして、次には絵をかいてもってきてくれた。

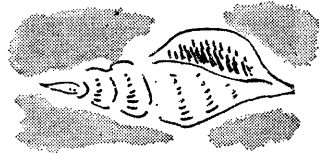
◇ ◇ ◇

ひとしは、無口で今までは積極的に教師にかかわっていないし、どう接したらよいかと考えていたところであった。このように短い時間ではあったが、ちょっとしたかわりが、教師と子どもを一步步近づけた原動力になったように思う。子どもと同じことをしてみることによって、何か通じ

るものが、出てくるということを感じた。

(四歳児 十月三十一日)

(カットも同書より)



幼児の教育 第七十四巻 第十号

十月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年九月二十五日印刷
昭和五十年十月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

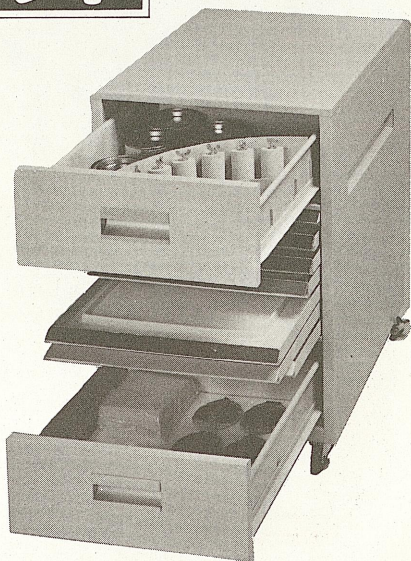
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします

できたよ！ ボクのはサカナだぞ！



キンダー 版画セット



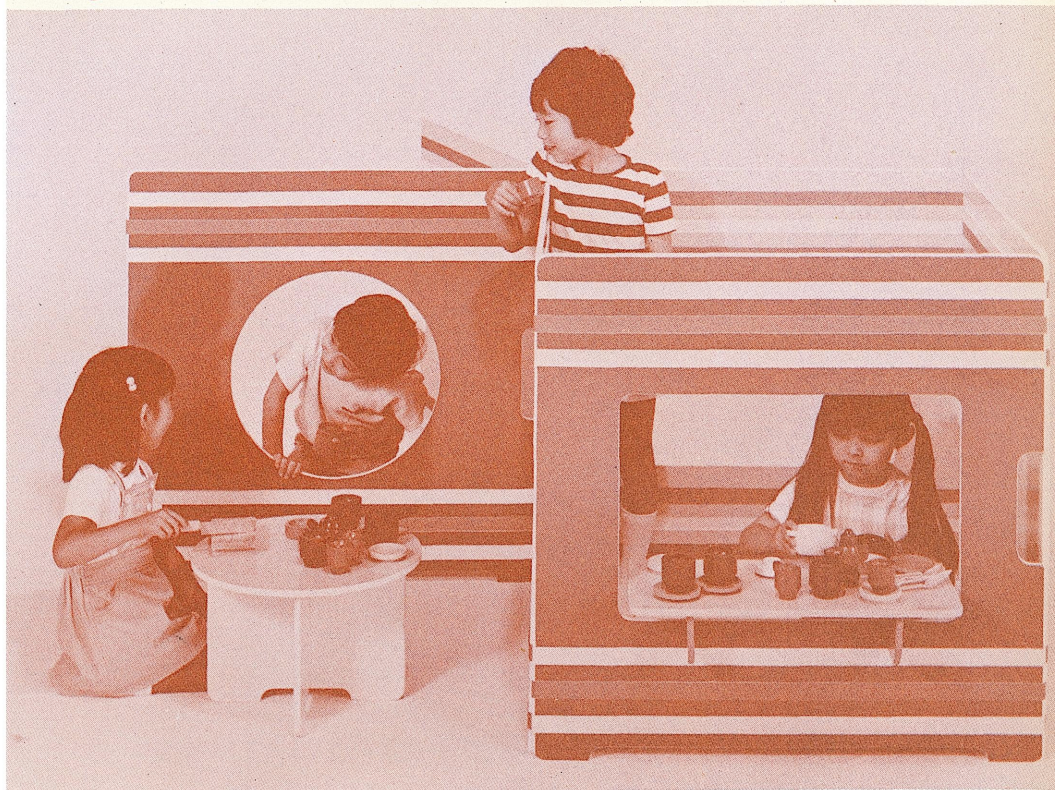
セット内容

インキ	7色	バレン	4コ
ねり板	7枚	タンポ	4コ
ローラー	7本	てぶくろ	4枚
インキペラ	7本	スチレンハンギ	4枚
整理ボックス	1台		

★ビニールエプロン 220円

〈幅39.7×奥行46×高さ62.3cm〉

バラエティに富んだ室内あそびを—

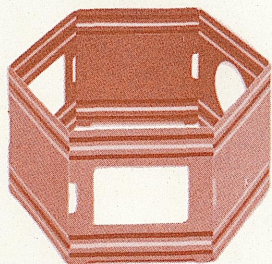


新しい遊びの空間を創造する

プレイサークル

(意匠登録出願中)

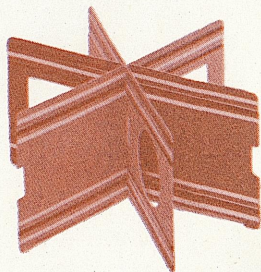
★簡単な操作で、ダイナミックな空間、変化に富んだコーナーが作り出せます。



●パネル
高さ90×幅90cm(厚み1.2cm)。
シナ合板クリアラッカー仕上げ。
黄・緑・白の3色塗装。

●ベルト
ナイロン、朱色。

1セット (パネル6枚、ベルト6本)
丸テーブル、取付棚各1)



58,000円

★くわしくはフレール館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL東京(03)292-7781(代)にお問い合わせ下さい。

フレール館